
kiss manual

かなた葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

k i s s m a n u a l

【Nコード】

N 3 1 3 9 Y

【作者名】

かなた葵

【あらすじ】

「なんで私だけあんな上司なの？」恋愛が苦手な新入社員の蕾の目の前には、仕事の鬼である上司『森崎主任』が。「いつか一泡吹かせてやる！」と意気込むのですが……。

この二人の恋は始まるのか……？

サイトで掲載していたものを、加筆修正しました。

1・今日も残業　～　舊side　～

「お疲れ様～！」

「お疲れさまです」

「お先でーす！」

定時を一時間前に迎え、どんどんオフィスの人数が減り静かになっていく。

この四月から会社の方針が　“　ノー残業”　になり定時上がりの人も多くなった。

一人、また一人と帰宅の途に着き、オフィスの人口密度が下がってゆく。

私、相原^{あいはら}舊^{くみ}は、そんなオフィスに取り残された新人OL。

「舊ちゃんまだ仕事終わらない？　大丈夫？　急ぎなら手伝うよ！」

三年目で二つ年上の久住^{くすみ}先輩が声をかけてくれる。

いつもオフィスで一緒にお弁当食べたりと仲良しの先輩で『瑠璃^{るり}ちゃん』と呼んで慕っている。

もちろん仕事中は「久住先輩」って呼んでるよ。

やさしい人で、『学生の二歳差って大きいけど、社会人だとそんなに気にならないから名前がいいよ』とお許しをもらっているの。

確か今日は遠距離の彼と『二週間ぶりのデート』って昼休みにウキウキしながら言ってた。

「大丈夫です。プリントだけなので……明日使う資料作り終わったら帰ります」

「そう？　まあ、無理しないでね～！　お疲れ」

「お疲れ様です！　瑠璃ちゃんデート楽しんできて下さいね～！」

笑顔で小さく手を振りながら挨拶を交わす。

化粧直しもバッチリ先輩は、ハハハッと照れ笑い。

卸したてのワンピースはNATURAL ROOMというセレクト
ショップで先日買ったものだ。

パールピンクの生地到大柄の花模様、裾がアンシンメトリーにな
っている。

トントンと立てた書類を両手で机で揃え、左上をホッチキスでパ
チンと留めてモニター右下の時間を確認する。時刻は十九時半。

鬼のような上司が、いーっぱい仕事を出すから、まだ帰れない。

自然とため息が零れる。ため息を吐くと幸せが逃げるって言うけ
ど、疲れてるんだもんしょうがない。

あれは……定時一時間前の事だった。

「相原。今、急ぎの仕事ないよな」

「そうですね。この資料は明後日のプレゼン用です」

「じゃあ。これ明日、朝一に会議で使う資料。三十部作っというて。
俺これから会議だから」

「はい。わかりました」

渡されたのはUSBメモリ。

これからプリント？ って何枚あんの？

ファイルを開いてびつくりした。

うわ。カラーページの枚数が多いよー！ 何時間かかんの？

なにが “ノー残業” だよ！

あゝ！！　なんで私だけあんな鬼上司なの？

新人社員として、この会社に入社して、早五ヶ月。
思えば今までの生活は順風満帆だった。

小さい頃から、母にも頼りにされるお姉ちゃんで三つ離れた弟の面倒もよく見た。

小学校では学級委員、中学・高校では生徒会と、みんなのために頑張ってきた。

絵にかいた優等生。

先生にも恵まれ、所謂、褒められて伸びるタイプ。

高校、大学と受験も難なくこなし、就職だつてこの氷河期に数社目の面接で十月には早々と内定をもらった。

しかし、社会に出て、初めての挫折を味わった。

いや。希望の会社に内定をもらったし、四月を迎えるまでは順調だった。

四月、五月の研修中也率先して行動し、人事課の人にも「センスがある」と褒められた。

六月本採用になり、私は希望していた営業二課に配属された。
ここまでは予想通り。

問題は上司。私を担当してる森崎主任はまさしく『仕事の鬼』だった。

「相原。まだやってるのか？　もう帰れ」

会議を終えた鬼主任が、缶コーヒーを片手に戻ってきた。

また嫌味？ 『まだやってる』が『まだこんなことも終わらない』にしか聞こえないんですけど。

しかも、『まだ』って……自分が頼んだ仕事やってる部下にそんな言い方する？！

「もう少しで終わります」

チラッと主任を盗み見る。

こんな時間まで働いても、草臥れた感の無いスーツ。
まだまだ仕事するって事かしら？

「今、終わりました」

出来上がった資料をプラケース（半透明のプラスチックで出来たダンボール）に纏めて入れ、作業台の上に置く。

パソコンをシャットダウンし、その間に手早く荷物をまとめる。

主任はモニターも見つめながら缶コーヒーに口をつけてる。

立ち上がり「失礼します……」と挨拶して逃げようかという声を掻き消し、

「相原。明後日のプレゼン十一時から十四時に変更になったから」と一言。

えー！ また変更！？ と思いながらも顔には出さず付箋にメモしパソコンに貼りつける。

「分かりました。お疲れ様です、お先に失礼します」と椅子を机にしまう。

「ああ。おつかれ」

顔をこっちに向けることもなく、返事が来る。
顔見て挨拶もできない大人って嫌ね。

明後日のプレゼンは初の私の書いた企画書が使われるプレゼンだ。
ちなみにこの企画書は先輩の作った内容を清書するのではなく、
発案自体が私の企画だ。企画を練り、資料を集め、企画書にする
という作業を一人でこなしている。普通なら入社二、三年目の仕事ら
しいが、入社数ヶ月の新人にそんな仕事振る主任。
信用されて仕事任されてると思いたい。

入り口の右側に設置させているタイムレコーダーにICカードを
翳す、首から下げている社員証にはICカードが内蔵されておりタ
イムカードの代わりに記録してくれる。

このカードは社食の支払いから会議室や資料室の鍵となり、使用
状況が社内LANで確認できる優れもの。便利な時代になったな。
なんて感心しながら、エレベーターに乗る。

正面玄関でもう一度社員証を翳し、退社完了。

もう！ ノー残業デイぐらいは、残業なしで帰りたいよ！

2・マニュアル人間 〽 舊side 〽

残業を終え、一人で住むアパートへ帰ってきたのは二十一時頃だった。

手を洗ってそのままキッチンへ向かい、すぐに食事の準備に取り掛かる。

今日のメニューは『グラタンとトマトマサラダ』

遅く帰っても出来るだけ、自分でご飯は作るようにしてる。

理由は仕事モードの自分を終わらせ、プライベートの時間になったのを実感できるから。あと、料理って意外とストレス解消になるんだよね。

食器棚の中にあるレシピは十冊以上。その中から一冊を取り出し、カウンターに広げてグラタンのページを開き、忠実に計量カップや大匙で量りながら作り出す。

スケールを使いマカロニを三十グラムと量り、大きな鍋でマカロニを茹でる。塩も小さじで量り入れる。

もちろん、茹で時間はタイマーが教えてくれる。

別の鍋でサラダに使うゆで卵も作りだす。

こんな、私は『マニュアル大好き人間』だったりする。……っというか『マニュアル依存症』と言うほうが正しいかもしれない。

昔から教科書をよく読んでその通りにすると褒められる。その繰り返しから教科書が大好きになった。

インスタントラーメンですら、きっちり湯量を計量し時間もタイマーで正確に計る。

「ラーメンぐらい目分量で作れるだろ」って弟にも言われる。

でも、最近はカップラーメンでも三分だったり四分だったりするし、調味料もお湯入れる前だったり、後だったりいろいろあるもんねー。

フライパンにバターを溶かしていれ鶏肉と玉ねぎを炒める。

そこへ小麦粉を入れ、ダマにならないように牛乳で伸ばしながら煮る。

そこにシーフードミックスも入れる。

いつその事、火力も弱火はココ、中火はココって書いてほしいぐらい。

その間にサラダ作り。

レシピをサラダのページに変えて、料理を続ける。

サラダは簡単。ゆで卵と湯剥きしたトマト、あときゅうりもみんなサイコロ型に切ってマヨで和えるだけ。それを小さなココットに盛り付ける。

茹で上げたマカロニとベシヤメルソースを絡め耐熱容器に入れ、とろけるチーズをかけたらオーブントースターで十分。

その間にお風呂へ向かい、湯を張ってる間に洗面所で化粧を落とす。

マニュアル好きの私は、家電の取扱説明書も最初から最後までしっかり読む。

一番読み応えがあるのは携帯かな？ 厚さが違うよね！
買い換えの時期はマニュアルにカバー掛けて、通勤電車で読んだこともある。

だって、どんどん機能が複雑になるし、使わない機能があつたなんて後から知ったら『もったいないことした〜！』って悔むし。
全部読む人どれだけいるのか、わからないけど、一度全部読むことを勧めるよ。

今まで、問題は全て教科書で解決してきた。

調べれば何でもわかるし、何度でも復習も出来た。
受験も『参考書』、就職も『指南書』がある。
持つてるだけで安心するし、持つてないと不安に襲われる。

マニュアル依存症の私は『マニュアルのないもの』がとっても苦手。

——『マニュアル』がない……それは恋愛。

お風呂に浸かって思い出す。

あれは高校三年の頃の話……。

初めて出来たカレは、同じクラスの男の子だった。
明るく元気で前々から気になっていた人。

隣の席になったのがきっかけで仲良くなり、どちらからともなく付き合いだした。

それまで恋愛に疎かった私は『自分に恋人が出来た』ということが嬉しくって浮かれまくってた。

今まで見向きもなかった雑誌の恋愛特集などには必ず目を通し『おススメ！ デートコース』って載ってれば、その通りのデートに連れてってもらった。

服装もファッション誌を参考に同じ服を買ってみた。

苦手なメイクだって雑誌片手に鏡と睨めっこでかなり努力した。

嫌われたくない一心だった。

——でも、ダメだった。

気合入れたファッションでデートに行けば、彼のラフな格好と合わないし。

ファーストフードは大口開けるからダメって雑誌に書いてあれば「ココじゃイヤ」と嫌がる我儘っぷりを発揮した。

「今日はココ行きたい！」ってデートした美術館は、絵画を観に行きたかったわけじゃなく、美術館デートしてる自分に酔ってただけだった。なんか大人のデートってイメージに自分を当てはめただけ。

付いて来てくれた彼だけど、後から思い出すと終始つまらなそうだった。

そんな彼の様子にも気づいてなかったんだよね。

ファーストキスだって、学校帰りの公園でキスされそうになったのを「初めてなんだよ……もっとロマンチックなのがいい」って断る始末。

なんかいつも空回り。

マニュアル通りのデートを相手に押し付け、形だけで満足してたのは私。

彼が望んでいたのはそんなデートじゃなかったんだよね……。

『なんかお前といても楽しくないんだよなあー。その雑誌通りの考え方なんかならない？ 結局相手は俺じゃなくてもいいんだろ？』

そう言って、彼は去っていった。

今でも別れの言葉が、重く押し掛かる。

それから、恋愛にどう対処していいのかわからずに臆病になってしまった。

ブクブク……。

いけない！ 湯船に浸かったまま昔の事を思い出してた。

……逆上せそう。

ダメダメ！ 暗い気分になっちゃうじゃない！！

さあ。グラタン焼けたかな？

おいしいもの食べて忘れよう！

食へることは元気の源だものね！

3・鬼主任 森崎 くさ side

本採用になった後、営業のエースと言われる二課の主任が直属の上司となった。

新人にはマンツーマンで教育係とされる社員が就く。

役職のない社員が、新人ひとりひとりに就くのだ。

形的には教育係だが、実質は秘書のようにについて回り仕事を覚える。

例年平社員が教育係になるのだが、今年は営業成績の上位から指導役が決まっていた。仕事の出来る人間の傍で体感することにより早く営業のスペシャリストに育てるために。特別に新入社員の中で成績優秀な一名を主任が担当することになった。

そして、新入社員の中で一番成績上位だったのは――

「相原です。仕事一生懸命頑張りますのでよろしくお願いします」

初顔合わせの時も緊張の中を腰から四十五度……うつん、九十度ぐらいまで深々と頭を下げ挨拶をした。

第一印象ってやっぱり大事だし、最初から嫌われたくは無い。

一瞬新人を担当するのがうんざりといった表情を浮かべるも、次の瞬間には営業スマイルを貼り付けた顔で、「主任の森崎です。よろしく」と一言あった。

決して笑ってはいない目は『足引つ張るなよ』ビームを発射している。

一瞬にして社会人生活が暗礁に乗り上げた気がした。

主任の名前は森崎慎一。もりさきしんいち

顔は整っていると思う、目鼻立ちもくっきりだし。

イメージはよく言って『さわやか』（主に取引先のクライアント談）、大概の人の評価は『クール』（社内の評価）、私に言わせりゃ『鬼。冷たい。いや、冷血？ 冷徹？』（たぶん主任と同じチームになるとこんな感じになるはず）そんな印象。

身長も高いし、大学も高学歴らしい。ファンじゃないから詳しくは知らないけどね。

しかもスポーツマンだったらしく細マッチョ。『スーツの上からでも良い筋肉してそう』ってみんな言ってるけど、よくそんなところ見てるよね。

月一の本社会議で発表される営業成績トップテンに毎回名前を聞くから仕事も出来るはず。

仕事だけでなくイイ男ランキングでもベストファイブには入って話だよ。

でも、中身は鬼。人間らしさを感じられない。

先日も同僚が告白したらしく、帰宅途中の森崎主任を駅のホームで捕まえての事だ。

「森崎主任。今、帰りですか？」

「見れば分かるだろ」

「良かつたら、今からご飯食べに行きませんか？」
「断る」

とそのまま振り返り帰ろうと歩き出す。

「待つてください。あの……ちょっとお話したい事があるのですがいいですか？」

小走りで追いかけながら話しかける。

「用があるなら早く言え！」

立ち止まってはくれたが、余計に人の多いホームへ移動してしまっただ。

「ここではちょっと……」

周りを見渡し、人の多さに躊躇する。

「ここで訊けない話なら、断る」

「……あの。主任。お付き合いしている人がいなかったら……付き合ってください」

まったく聞く耳を持たない相手に業を煮やし投げやり気味に告白したらしい。

「断る。お前会社へ何しに来てる？ 仕事するところだぞ！ 恋人を探すなら他へ行け……」

と、その場で一刀両断って感じだったらしい。

駅のホームで周りの乗客が引くくらい血も涙も無い断り方。断るにしても、もっと思いやりを持ったやり方とかできないのかね？

それでもその同期の女性からは「直属の上司なんて、四六時中一緒じゃない！」って目をハートにして羨ましがられ「付き合いえないなら、せめて部下で傍にいたい。それもダメなら同じフロアで仕事したい」だって。変わるなら変わってあげるよ。残業が増えて、プライベートが無くなるだけなのにな。

森崎主任は、自分にも周りにも厳しいタイプで、他人にまで「一言で、十の意味を理解しろ」これが原則。

この間だって……

「森崎主任。三番にお電話です」と別のフロアから内線が回ってきた。

「お待たせしました。森崎です……」と営業用の声色。

目を瞑って声だけ聞くと別人のようだな……。

……っていけない声聴いてる場合じゃない。電話は誰からだ？

「……橋本さん。お世話になっております。……」

橋本さんって……確か、KUNISHIGEの品川事務所の担当者？

「……高輪……ですね……」

今、KUNISHIGEの案件は四件あった。その中でも高輪って言えばアレだ……

その話し声を頼りに、クライアントを選び出し、取り扱っている案件の中から、電話の内容に合う資料を選び出し、机の上に差し出す。

「この件につきましては……」

と、その後の電話はスムーズに進んだ。

私は、何事もなかったかのように仕事を始める。

もちろん、今後のアクシデントに備えて、聞き耳は立ててるけど

ね。

別に、感謝されたくて仕事してるわけじゃないけど、せめて一言『ありがとう』とか言ってくれても、いいと思わない？

小さなコミュニケーションが仕事を円滑に進めたりするんじゃないの？

普通人間なら……ううん。社会人として、大人として『ありがとう』ぐらい言えて当然よね。

確かにやって当然の『私の仕事』なんだけどさ。

正直、面白くない。

あと、主任の特徴は決して笑わないって事かな。

一部では笑った顔が見られたら幸せになれるという社内伝説まである。

誰に対しても厳しく、怒鳴られるのはまだ序の口、そのうち返事がもらえなくなり、もくもくと自分の仕事を始める。

私の入社前の話では、大きなミスをして契約をふいになった時、その失敗した部下に対して氷の眼差しで「お前帰れ！」の一言と共にタイムリーダーをチェックし退社させたらしい。誰もフォローできず状態じゃなくなり、ワンフロア全体が一瞬で凍ったのは有名な話。その後部下は自主的に辞めたらしい……。

確かに主任がかなり力入れてたプロジェクトらしいけど、コレって立派なパワハラじゃない？

思えば森崎主任の下で、働いた最初の一週間は酷かったな。

「お前、これくらいの事が出来なくて仕事してるって言えるのか？」
「覚える気ある？ メモに頼ってるから覚えられないんだよ！」

って、怒鳴られた回数は、それまでの人生で叱られた回数を超えた。

第一印象はきつと『女なんか仕事出来ない』って思ったよね。

うん。あの目はきつとそう思ってたはず。

イヤでイヤで、なんであんな人が上司なんだろうって思ってたけど、最近はそのまで見下ろされてないかも……。

でも、まだまだこれから！ このままでは終われない。

今は『少し使えるじゃん』って思ってる程度だろうから、そのうち『お前、頼りになるな』とか『お前と仕事出来て、よかった』とか言わせるぐらい仕事して、いつか『女に負けた』って一泡吹かせてやる！

4・仕事しろ！仕事　＼ 慎一 side ＼

これまでの俺は仕事一筋だった。

仕事も本社勤務と言えばエリートコース、営業での成績だった。このとこトップを独走だった。

出世も二十八歳にして主任ならそれなりにいいほうだろう。

出世でネックになってたのは、人間関係だ。

仕事のできない奴に、はつきり「やる気のない奴は、やめろ！」と、すぐに口にしてしまうのだ。

問題なのはわかってる。

しかし、それですぐに辞める奴もやる気がないだけだと思うが違うのだろうか。

根性のない奴が多くて、最近では叱るとすぐにパワハラだって騒がれるし仕事にならない。

会社には仕事をするために来てるのであって、それ以外の煩わしさから解放されたい。

一番面倒なのが、女どもだ。

仕事もできないくせに、仕事帰りや飲み会などでは寄ってきて、周りで騒ぐ。

きつと「ウルセー！」って怒鳴ったら、泣くんだろうな。それもウザイ。

毎年、新入社員の教育係は入って、二、三年の暇な奴らの仕事だった。

人に教えることで、自分の復習にもなるし、なにより忙しいときに邪魔されたら敵わない。

それが今年に限って、使える社員を増やすためだか知らんが俺が子守をするなんて。

まったくついてない。

しかも、男なら鍛えがいもあるだろうに、よりによって女だ。

チャラチャラした服も、間延びした話し方もイライラするだけだ。

教えることなどなにもない。

一人前になってから、俺の部下になってくれ！　そう思わずにはいられなかった。

俺が担当するのは相原という女だった。

なんでも、面接官が採用を即決させるほどの期待の新人で、研修でも実力を発揮し、人事部推薦のもと欲しがる部署が多かったらしいが、結局は本人が希望したこの営業に配属された。

有名大学を主席で卒業した秀才らしいが、学校でのお勉強通りほど、会社の仕事は甘くない。

見た目は地味なリクルートスーツに身を包み、メイクもかろうじてしてるのがわかる程度。

もちろん香水のようなうざったい匂いもしない。

髪も邪魔にならない程度に纏めている。

かといって、野暮ったい訳じゃない。美人で学歴も高く、社内で

も人気があるようだ。

そんな相原も最初の頃は仕事でミスすることも多かった。

……多かったと言っても、他の新人に比べたら雲泥の差なんだが。

しかも女の割りに多少きびしく怒鳴っても、泣いたりしない。

そして、社会人の基本だが、同じミスは繰り返さない。

他の新入社員は出来ない奴も多く、何度も何度も教えては時間を
く、本来の仕事が出来ずにイライラする。

でも、相原は違った。

いつも小さな手帳を片手に、仕事の仕方をメモしていた。

一度教えた仕事は、メモを頼りに素早く行っていた。

もともと真面目で優等生なのだろう、やる気があり予習も復習も
きっちりこなして、どんどん仕事力を身につけていった。

本採用になり六月に俺の元に来てまだ三ヶ月。

きつと、去年入った奴よりも使えるレベルにまで成長してる。い
や、自分で企画立てるまでに成長してるんだから三年目レベルか？

まあ、俺が教えてるんだから、当然といえば当然だが。

最近では、俺の仕事内容も理解してて資料を先に用意して、欲し
いときにはすぐに出してくれる。

この間も、先方から掛かってきた電話の内容からクライアントを
割り出し、必要だと思う資料を横から差し出してくれる。

今までは自分ひとりで仕事してる気になってたけど、今では円滑
に進むのに相原の協力が必要な事に気づき始めていた。

相原が同行すると軽い雑談で打ち合わせの場の雰囲気が和み、話がスムーズに進むこともあった。いつもは時間が惜しいとすぐに仕事の話が始めていたが、人間相手に仕事してるんだから、少しでも相手の心証がいいほうが仕事も捗る。そんな事も忘れていた。

「……森崎さん、いい部下に恵まれてますね。羨ましいです」なんて営業先でも褒められた。

自分のことじゃないが褒められると嬉しいもんで、本人に伝えると「お役に立てて、よかったです」とはにかんだ。

いつも俺をキツと睨むように仕事をしているのに、花が咲いたような柔らかな笑顔にドキッとする。

なんだ？ この笑顔の破壊力は、俺まで釣られて笑顔を見せそうになった。

「蕾ちゃん。もう帰る？ 一緒にご飯食べに行こう！」

定時を過ぎ、同じ課の久住が相原に声を掛けているのが声が俺まで届く。

相原は隣の席だし、仕事をしてても自然と聞こえる範囲だ。

「あれ？ 瑠璃ちゃん今日デートだったんじゃない？」

「仕事でドタキャン！ 今頃、ステキなおじ様とデートじゃない？」

「え！ そうなんですか？ 残念ですね」

「もう、せっかくRistorante soleの予約してあったのに！ だ・か・ら、蕾ちゃん！ ご馳走するから行きましょ

「！」

「えー！ いいんですか？」

身の回りの片付けの手を休めることなく会話は続く。

二人は「お疲れ様です」と挨拶と共に帰って行った。

自分のプライベートが無いように、部下のプライベートなんて全く気にしてなかったけど、相原って残業で遅くなっても文句言わねえーよな。

普通の若い女はデートとか合コンで忙しいんじゃないのか？
今まで一回も『早く帰りたい』って言ってきたことねーな。

相原もデートとかするんだよな……きつと。

5・家飲み専門 1 〱 舊 side 〱

ゴクゴクゴク。 プツハッ。

風呂上がりのビールって格別だよな。

缶ビールを、お気に入りのグラスに注いで一気に飲み干す。

なんか仕事をした充実の時間があるからこそ、味わえるんだよね！

基本的にはお酒が大好き。

ビールも、カクテルも、ワインなんでも好き。

でも、『外での飲酒禁止令』があり家飲み専門。

私、ちょっと問題があつて、聞いた話によると酒癖が良くないらしい。

最初は普通に飲んでるの。人によつては『まったく顔に出ないね』

とか『お酒強い？ 全然変わらないね』って言うのよ……最初はね

！ でも、途中から記憶を無くし、最後の頃はどこでも寝ちゃう……

らしい。しかも一度寝ると朝まで熟睡しちゃうんだ。

朝起きて二日酔いつて経験はないけど、前日の記憶はない。

そして、熟睡のおかげですっきりとした目覚めが待ってるの。

みんな一度ぐらい記憶無くすとか、寝落ちとかないかな？

私も自分では珍しくないって思ってたんだけど、記憶のない部分

で他人にかなり迷惑をかけてたらしい。

あれは、三年前の二月十一日のこと……

この日は高校時代からの仲良し四人組の中で誕生日が一番遅かつ

た天野くるみの二十歳のバースデーだった。前々から『全員が二十歳になつたらみんなで祝杯を挙げよう』って話していた通り、永橋ながは煌李しきり、鈴川美羽すずかわみうと私の四人で一席設けたのである。

「じゃ、くるみの成人を祝して……」「かんぱーい！」「」

まずは煌李の挨拶で乾杯。黄金に輝くジョッキを片手に笑顔で咲く。

すると突然くるみが「ドイツ式で乾杯したい」と言い出した。

「ドイツ式ってなに？」

くるみがいうにはジョッキを片手に相手と腕を絡ませて、自分のジョッキを飲むらしいが……何のため？

普通に飲むよ……。

「ああ。あれって、結婚式で新郎新婦がやるんでしょ？　なんで女同士で？」

美羽は知ってるんだ。雑学に詳しい？　それとも常識？

「いいじゃん！　元々はたぶんドイツの古い習慣とかでしょ？　友愛の証だった気がするし、誕生日なんだしイベントっぽいじゃない？」

へー。クロスハンドって言うんだ。世の中知らないことって多いね。

ホントくるみはイベントって言葉に弱い。

お祭り大好き人間だし、仕方ないか。

でも、周りを見ようよ。こんなおかしなテンションなのウチの席だけだよ。

三人がくるみと一回ずつクロスハンドで乾杯したらくるみが満足したらしく「よし、今度の合コンでやってみよう！」と楽しそう。

そして、こんな軽い流れでやった乾杯が、うちの乾杯では定番となつてゆくのだつた。

テーブルには大根としらすのサラダや串揚げの盛り合わせが大皿で並ぶ。四人の中でお母さんの存在の私がサラダを取り分け、串揚げを美羽が小皿に盛る。こうやって取り分けたりとか人のお世話するのが好きなんだよねえ。頼られてる感に酔つてるだけでも知れないけど……。

『プチ宴会コース』を頼んでいるので次々と料理が運ばれてくるのだ。もちろんこのコースは二時間の飲み放題付き！

みんな思い思いにカクテルやチューハイを頼み、私も色とりどりのグラデのグラスを空け「次は〴〵。梅酒、ロックで！」って間を空けずに酒を流し込んでいた。

「あつ！　くるみ！　誕生日プレゼント忘れるとこだった！」

煌李が鞆から小さな包みを取り出し、くるみに手渡す。

私も慌てて、自分の鞆からプレゼントを引っ剥いだし、結つてあるリボンの形を整える。

プレゼントの中身はネイルチップ。

くるみは高校時代から綺麗にネイルをしていた。何でも爪切りを使うと爪に負担がかかって悪影響だつて鑢で削つてるほどネイルに命かけてた。でも、美容師になるために美容学校へ入ってからにはシヤンプーをするため爪を短くしなきゃダメでプライベートの時だけネイルチップを付けていた。今日も服とコーデした水色のフレンチネイルが付いていた。

「私からはコレね！　大事に使つてね〜！」
おめでとこの言葉と共にくるみに贈った。

グラスの氷がカランと音を立てる音が心地いい。

選んだネイルチップはフェミニンな淡色系のピンクのグラデにバラやスワロフスキー、パールが付いた豪華なもの。それでいて色と数が抑え気味で、少し大人っぽさがある。今までのカワイイ路線から少し畏まった席でも使えそうな物で、見た瞬間に『これ、くるみに似合う』って一目惚れしたの。

友達同士のプレゼント交換は予算五千円って決めてるんだけど、値段もぴったりで『今日、私が買うためにココにいたのね』って思うほど運命を感じた。

すぐに包みを広げ中身を確認するくるみは、

「カワイイ〜！ しかも大人っぽい。こんなの持ってない！」

笑顔を見て自分に『グツジョブ！』って褒めたいくらいだった！

「ありがとう！！！ これでやっと大人の仲間入りだよ〜！」

両手にプレゼントを抱えたくるみが泣きまねをして喜ぶ。

と、記憶に残ってるのはココまでだった……。

でも、これって飲み会にしては最初の頃だと思う。

6・家飲み専門 2 〈薔 side〉

「薔！ 良かった〜！ 気が付いた？」

美羽が私の顔を覗き込んで、ほっとため息と共に呟いた。

「ここ……どこ……？」

真っ白な天井、カーテンも、ふとも真っ白。

「病院だよ。薔、救急車で運ばれたの。記憶に無い？」

元々色白の美羽の肌が青白く血の気が引いている。

ベッドに寝てる私よりも具合悪そうに見える……そんなになるまで心配してくれた？

ってそうだよな。

今の時間詳しくは分からないけど、カーテンからの光の差し具合で朝が訪れているのは分かる。酔いつぶれた友達を見捨てて寝ちゃうような美羽じゃないもの。

「ごめん。えっと、まったく記憶が無い。私……飲み会でどうなった？」

「お酒飲みながらずっと楽しく会話してたのに、突然……なんていうか暴れるというか手が付けられなくて、三人掛かりで押さえ込んで……最終的にはお店の人が救急車を呼んだの」

あわわ。私、暴れたの〜！？

手が付けられないほど？ 店員が救急車呼ぶほど！？

話を聞いている途中に、血の気が引いてきて、思わず気を失うかと思った。

でも、そんな現実逃避しても遅いよね。実際に私が迷惑掛けたんだし。

うわー。……なんて迷惑なヤツだ。

「……ごめ……ん」

「で、今は煌李が蕾ママ迎えに駅まで行ってる。くるみはギリギリまで居ただけど学校で抜けられない用事があるからってここから直接学校行つたよ。『飲ませすぎてゴメン』ってくるみの伝言。私も……ごめんね」

「美羽、ごめん。みんなが謝ることじゃない。私が悪いんだもの。煌李とくるみにも後から謝るよ」

みんなに迷惑かけまくって、最悪な事に自分の都合の悪いところだけ記憶から消して……。

しかもみんな寝ないで心配してたのに、一人睡眠十分で目覚めすつきりしてるし……。

それなのに、みんなに謝らせるなんて、私、最低だ。

合わせる顔も無いし、自然と視線が美羽の顔から目の前に広がる布団に移る。

なんて言葉を返したらいいのかもわからない。

なんとなく、重苦しい空気が漂う。

「いや、いいよ。無事でよかった。もー、心配したんだよ。ホントにずっと普通に会話してたし、顔が赤いとかも無くて、まさか蕾がそこまで酔ってるなんて思ってたから……みんな吃驚して酔いが醒めちゃったよ……」

クスクスと笑い出した美羽を見て少し救われた。いつか時が経てば笑い話に出来るかな。

そこへ、ノックの音と共に煌李に連れられた母が入ってきた。

「あ！ 煌李、ママ……ごめんね」

「もう。この子は！ 大人になったと思ったのに、二十歳って言うてもまだまだ子供ね。恥ずかしい……」

と言いながらも母は優しく抱きしめてくれた。

「蕾ママ、ごめんね。私達がいっぱい飲ませちゃったから……」煌李が心配した顔でママに謝る。

「ううん、違うのよ。あまり親に迷惑掛けない子だったから心配したと同時に人並みの子でよかったって思ってる。みんなには迷惑掛けたのにゴメンね」

そんな姿を見て居た堪れなくなった。

「煌李、美羽、そしてママ。本当にすみませんでした」
ベッドの上からで申し訳ないけど、心から謝罪した。

後日改めて、くるみも含め三人に謝った。

『もうお酒なんて飲まない！』ってみんなに宣言した。

覚えてはいないけど、友達に迷惑掛け捲りだし、病院へは親まで呼び出す事態ってかなり酷い。

二十歳のうら若き乙女の行動じゃないよね。

でも、みんなの反応は……

「お酒での失敗ぐらい、長い人生で一度ぐらい経験するもんだって！」

「そうそう。救急車乗ったって自慢できるよ」

なんて不謹慎なこと言ってる。でも分かっている。

本気じゃなくって私が必要以上に心に傷を残さないために……み

んなの心遣いなんだよね。

「お酒止めたら、みんなで飲めないじゃない！」

「今度は誰かの家で飲み会しようよ」

「大丈夫。ちゃんと朝まで面倒見るから、安心して飲みな！」

煌李の男前の台詞に惚れそうだよ。

みんな……ありがとう。

それ以来、外では「飲めません」って通してる。

もちろん会社でも「お酒、飲めません」って言い訳してる。

「一杯ぐらい付き合いで」とか「社会人になったら付き合いで飲むものだ」って言われるけど「急性アル中で救急車呼んだことある」って言うのたいがい「仕方ない」って言うてもらえる。

まあ、実際に乗った人なので、言い訳じゃないけど。

そして一人寂しく「ウーロン茶」って言うのだ。

最近はノンアルコールビールとか頼むこともあるけど、飲めるのに飲めないって余計にツライ。

元々下戸だったなら納得するけど……。

唯一、外で飲めるのは煌李、くるみ、美羽の三人揃ってる時だけ。だって一人や二人だと私をフォロー出来ないから。

しかもアルコール一杯のみって制限付き。

これは『飲まない』宣言した私と、『いいから飲め』と言うみんなとの折り合いを付けた結果。

その分、家でいっぱい飲んでるんだけどね。

7・瑠璃ちゃんとデート　～舊side～

一人ベッドを背もたれにして、テレビを聞きながらビールを飲む。テレビではバラエティ番組が流れてて、タレントが有名レストランで食事をして値段を当てるクイズをしていた。

「あ！　ここって瑠璃ちゃんが行ったところだ」

画面に映るのは、美味しそうな食事。その横には当然釣り合ったワイン。

あーあー。あのレストランでお酒飲めないなんて、もったいないことしたなー。

恋人にデートのドタキャンされた瑠璃ちゃんが誘ってくれたのは「Ristorante sole」といってデートコースで憧れのイタリアンレストランだった。

「なんか、一人で飲んで悪いわね」
とグラスを傾ける瑠璃ちゃん。

食前酒から飲めないのは痛かった。さすがに高級店だけあってシヤンパンだっていいのだった。白身魚のカルパッチョは目にも鮮やかで美味しかったけど食べれば食べるほどお酒が欲しくなった。アルコール抜きの中で選んだスパークリングウォーターじゃやっぱり物足りない。

パスタはペスカトーレのリングイネでムース状の生クリームが乗っていて、そのまま食べても良し、ムースと合わせても良しで思わず『白ワインください』って言葉が出るところだった。

そしてメインは乳飲み子牛のカツレツ。小さく一口大にカットされトマトのスライスの上に乗っており、ソースが芸術的な模様を描き出している。

飲んでいるのは料理に合いそうな赤ワイン……もちろん飲んでるのは瑠璃ちゃんだけだね。

「どうぞどうぞ！」

絶対おいしいよ、あのワイン。

見てて思わず、ゴクって喉が鳴っちゃうよ。

ああー。瑠璃ちゃんだけにでもお酒飲めるってカミングアウトしておけば……。

でも、飲んで暴れたら……。

ダメダメ！ 会社の先輩だもの迷惑掛けられないよ。今後の仕事に支障が出そうだし。

ふと、瑠璃ちゃんの手が止まり視線が眼下に広がる大都会綺麗な夜景が瞳に映る。

寂しそうにため息が零れる。

それは、そうだね…… 本当なら恋人とこの時間を分かち合ってたはずなもの。

「ここ中々予約取れないところなのに…… 彼氏さん仕事で残念でしたね…… 一緒に来たのが私で申し訳ないです」

小さな声で、でも少しでも明るく聞こえるように聞いてみる。

店内を埋めている席のほとんどがカップルだ。やっぱり恋人と来たいよね。

「し・ご・と……ねー。仕事じゃ、勝てないわよ。……彼ね、今日取引先との接待なのよ……。ステキなおじ様とデートって言ったでしょ？　なんか取引先の社長にえらく気に入られちゃって、家族の食事会にまで呼ばれてるんだって。社長の娘が大学入りたての十八歳だったかな？　『娘の婿に』って思ってるみたい。……人間性が評価されすぎちゃってさー……」

気の抜けた声。　前々から来たいって言ってたお店だしね。ここに来るのを楽しみにしてたぶんダメージは大きいんだと思う。　誰から好かれるような完璧な彼氏を持つのも大変なのね……。

「まあ。せめてもの救いは、彼がこんなことで私と別れる心配をしてないことね！　彼はそんな理由で結婚相手を選んだりしない人だもの。……それに彼女は十八歳でしょ？　彼二十八歳よ！　さすがに十歳差もあれば……ねー。ありえないわよ。……でも、ドタキャンは気分悪いわ」

「ドタキャンは嫌ですけど、それでも彼氏さんを信頼できる関係ってステキですよ、私も彼氏欲しいなー」

「蕾ちゃんは何？　いないの？　好きな人とかちよつと気になる相手とか」

「出会いが無いですもの。私、恋愛が苦手で……」

「でも、彼氏は欲しい？」

「そうですね……」

「じゃあ、好みのタイプは？」

「心の暖かい優しい人がいいです……あと、笑顔のステキな人。みんなどこで知り合うのかな……？」

「出会いねー。誰か紹介する？」

「うーん。なんか紹介してもらってうまくいかなかったら、紹介してくれた人に悪い気がして……なかなか積極的になれないんですね」

「そっかー。それはわかるけど、そうなると合コンとか？」

「お酒飲めないと中々参加しにくいんですね」

ホントは飲めるんだけどね。

合コンでお酒なんて飲んだら……きつと暴れる迷惑な女で救急車じゃなくて警察呼ばれかねない。そんな女だれも彼女にしたくないものね。

「仕事先では？ ほら、よく同行でいろんなエリートと出会っじゃない？ どう？」

「営業先ですか？ 無理ですよ。森崎主任と一緒に行動してて、そんな時間まずないです」

「あー。そうだね。じゃあ、いつそのこと森崎主任にしちゃえば！」
そんな投げやりな。もう、見捨ててる発言ですよ。

「ありえません。好きになる要素がまったくないです」

「そう？ カッコよくって社内でも人気じゃない？」

すでに、瑠璃ちゃんも笑いながらで本気じゃないのがミエミエですよ。

「瑠璃ちゃん、あの中身知っててよく言えますねー。心の凍った鬼は嫌です！ 私のタイプの正反対じゃないですか？」

「あはは。確かに心の凍った青鬼って感じ。でも、意外と恋人には甘かったりして……。うまくいけば社内一の仕事の出来る美男美女カップルになれるわよ！」

青鬼、確かにそんな感じ。赤鬼だったら怒った感じだけど、イメージないものね。

その青鬼が恋人に優しくしてる？ うわー。それ、見てみたいわ。もう！ そんなの目指してません！」

そんな会話を思い出しながら、ビールの入ったグラスを空ける。すでに、テーブルに空き缶が三本……。

缶ビールをグラスに傾けると、半分ぐらいで泡しか出なくなる。あれ？ もうカラ？ 明日休みだし、もっと飲んじゃおうかな？ 冷蔵庫はキッチンの端っこで部屋を出て直ぐのところ。移動距離も三メートルぐらい、起き上がるのもだるくって膝と手を付いて猫のようにキツチンへ。

冷蔵庫を開けると……からっぽ。

うわぁ。さっきのラスイチだったのかー。

あー。酒が切れた……。

でも、酒飲んでからは、たとえコンビニでも外出は禁止なのだ。うん。出歩いてはいけない自覚はある。

彼氏がいたら……週末に家で一人酒とかしなくなるのかな？ 別に、これはこれで、寂しくはないんだけどね。

こうなったら寝るに限るわね。

おやすみ……。

8・きっかけは残業　〈慎一 side〉

珍しく定時ギリギリに先方から電話があり、『五日後のプレゼンを明日に変更して欲しい』と言ってきた。

資料の出来は七割ほど。

内容は固まっていたが、資料を製作するには残業が決定的だ。何時に帰れるかの目途も立たないほどだった。

電話を切って、すぐに相原が「明日に変更ですか？　間に合いますか？　手伝います」と声を掛けるのと同時に資料を作業テーブルに並べ始めた。

「この仕事は俺がやるから、お前は帰っていいぞ」

普段『鬼』なんて言われてるのは知ってるけど、さすがにこんな無茶な仕事は手伝えとは言えない。

「いえ。これは私の担当です。お手伝いさせてください」

「何時に帰れるのかわかんねえぞ。いいのか？」

「大丈夫です」目が真剣だった。

「わかった。よろしく頼む」

頷いた、相原はもう、仕事に取り掛かっていた。

定時を迎え、三十分もしないうちにまばらになってきたフロアは、二十一時を過ぎ、俺と相原だけになった。

「相原！　コレ」

このまま声を掛けなきゃ、休憩も取らない勢いの相原に缶コーヒ―差し出す。

「ありがとうございます。すみません、いただきます」

相原が何を飲むのか、まったく分からず、俺と同じコーヒーを買ってきた。

自販機前で金を入れてから『相原って普段、何飲んでたっけ？』と、全然思い出せなかった。

どれだけ、他人のことを意識して見てないか……だな。

「相原。もういい加減帰れよ。後は俺一人でも終わるし、プレゼンは朝一でもないし」

缶コーヒーを飲み干したところで、声を掛ける。

「主任。最後までやらせて下さい。明日だって朝から別件で急ぎの用事が出来るかもしれませんし、一人でやるよりも二人のほうが早く終わります。私のことなら心配は無用です。……コーヒーご馳走様でした。糖分も補給出来たので、まだまだ行けます」

また、モニターを見つめ、仕事に戻る。

こんなにちゃんと仕事に向き合ってるのに、『女なんか』などと考えてたのか。

自分の考え方の『甘さ』と『偏見』が、心に重く押し掛かる。

何の会話も無いまま、キーボードをたたく音だけが響く室内。

そして、時計の長針は更に三周した。

「相原。どうだ？」

「こっちは入力も終わってます。今、プリント確認中です」

「よし。じゃあデータバックアップとってくれ」

残業は午前零時過ぎまで掛かり、会社を出たのはそれから三十分過ぎた頃だった。

「遅くまでメシも食わずに、悪かったな。今からメシでも食い行くか？」

「いえ。仕事で遅くなったのは、主任の責任ではありませんし……」
「俺が腹減ったんだよ、付き合え」

断られそんな雰囲気になる前に、無理やり連れ出すことにした。さすがにこんなに残業させて、礼もせず帰すなんてなんとなく後味悪い気がした。それにこんな時間だ、終電も走ってないはず。

二人で食事をするのは、初めてだった。

時間も遅く大概のレストランは閉店してて、入ったのは駅前の居酒屋でいわゆる赤提灯。

お洒落な居酒屋ではなく、オヤジしかいないような飲み屋。店は綺麗とは言いがたいが、つまみ類は多いし旨い。

「こんなとこしかやってなくて、わりーな」

女は嫌がるのか？

そう思ったのは席に着いた後だった。

「私、こうゆうおつまみとか好きですし。美味しいそうです」

そうなのか？

女って洒落たレストランとか好きなんじゃないのか？

そう。この間久住と話しをしたレストランとかの方がいいだろ。

「ビールでいいか？」

「あの。すみません。私お酒飲めなくて……ウーロン茶で」

「わりの。飲み屋じゃない方がよかったか？」

「私、飲み屋の雰囲気は好きなんで大丈夫です」

俺に付き合ってくれたのか？

それとも違うところ行きたいって言い難いか？

「社会人だと、飲みに行くことも多いだろ？ 一杯ぐらい付き合いで飲めた方がいいぞ」

「そうですね。でも大学生の頃、急性アルコール中毒で救急車呼んだことがあって……」

たまに居るな。そんなヤツ。

「あー、そつか。無理すんなよ」

「……でも、一杯だったら……飲んじゃおうかな？」

「飲むか？ 無理して俺に付き合わなくてもいいんだぞ」

「えへへ。カミングアウトしてもいいですか？ 実は飲めるんですけどすごい酒乱なんです。酔ったら面倒見てくれます？」

ニコッと笑った相原が妙に可愛く見えた。

いつもと口調も違うしな。

「酒乱の相原？ 想像つかねーな。でも、上司に面倒見させるなんていい度胸だな」

フツと笑った俺に。

堂々と「お酒飲んだ後の自分に責任は持てません」って言い切る相原。

おもしれーじゃん。

生ビールを二杯頼んだら、待ち構えていたかのようにすぐに運ばれてきた。

さすがおっちゃん連中を相手にしてる飲み屋だな。

「んじゃ。おつかれー!」

「お疲れ様です」

乾杯して、驚いた。なんと相原はジョッキを一気に煽ったのだ。

「んな、一気に飲んで大丈夫か?」

「え!?! ビールなんてのと越しですよ。一気に飲まなきゃ美味しくないし。すみませーん、もう一杯いいですか?」

おい。飲めないんだろ。……しかも一杯だけって言ってなかったか?

9・酒乱 相原馨 く慎一 sideく

それから、普段話さないことを色々話した。

少し酒の入った相原とは肩の力が抜けたように話しが弾んだ。

相原には高校生の弟がいてバスケの試合の応援に行ったとか、仲良し四人組の女友達との、ハチャメチャな話とか。

「いつも飲んでからメはラーメンなんだよ」って俺までつられて饒舌になる。

自分からプライベートな話題まで振ったりして、こんなに色々話すなんて……俺も酔ってるのか？

「ラーメンもいいですね〜！」

「お！ 今から行くか？」

「今からって、もう一時半ですよ。明日も仕事ですし……それに出来ないっばいです」

目の前に、空になった皿がいくつも並ぶ。

確かに、二人して結構食った。

ビールばかりジョッキで三杯は飲んだしな。

「ああ、そうだな。じゃあ今度ラーメン屋行こうぜ。うまいところ知ってるから」

笑って女と話すのなんて、久しぶりだ？

「じゃあ、また残業のある日に、連れてって下さい」
「やっぱり笑うと結構イイな。」

『もっと、この笑顔が見たい』そんな風に思った。

酒が飲めないと云っていた相原がこんなに飲むとは思わなかった。自分では酒癖悪いって云ってたけど大した変化はない。多少口が滑らかになり砕けた口調には変わったが、特に酒に悪い酔い方をしているようには見えない。『酒乱になったら……』なんて脅しといて……普通じゃねーか。心配させやがって！

そう安心しきっていたが異変があったのは、店を出た後だった。

いきなり腕をとられ、腕にしがみついた相原は「少し眠いです……」と目がトロンとしていた。

「髪、邪魔」って後ろで纏めている髪を解いて、指で髪を梳く。

やば。こんな時に色気を出すな！

このままじゃ、相原から目を逸らせなくなる。

「もう電車もないしタクシー拾うから待ってる」

相原を歩道に残し、慌てて車道へ目を向けた。

遅い時間でも駅前なだけあって、タクシーは何台か走っていた。だが、すでに乗車済みが多く空車が見つからない。

「主任！」

呼ばれて振り返った目の前には相原の顔があり、いきなりチュッとキスされた。

「えへへ。キスしたくなちゃった」とおどけた笑顔を見せる相原。

「な、なにしてんだ？」

「うーんとね。お酒飲むとキスしたくなっちゃうの」もつとキス

していい？」

返事をする前に、今度は頬にチュとしてきた。

「お、おい。相原？」

これも酒乱つて言うのか？ ああ。あれか『キス魔』ってヤツか？
今までに出くわしたことがないからどう対処していいのかわから
ん。

なんとかタクシーを捕まえたが、今や腕に抱きついていて。

この数分の間にいったい何度キスされたのだろう。

口紅の痕は付いていないようだが、もし付いてたら顔中が口紅だ
らけだな……。

相手は酔っ払いとは言え、なんで俺はされるがままになってるん
だ？

キスされて嫌じゃないから……か？

だいたい、この女は自分の胸が俺の腕に当たってることに、気が
付いているのだろうか？

男としては嬉しいことでも、普段バリバリ仕事をこなす信頼度の
高い部下なのに邪まな考えはマズイ。

そうだ。相原は部下だ部下……！！

必死になって頭を仕事モードに切り替えてみる。

「おい。相原寝るなよ。家どこだ？」

「えーっと。ハニーマートの裏にあるアパートです」

ハニーマートというスーパーはここらではポピュラーだが、何店
もあるので場所の特定が出来ない。

「ハニーマート？ 海岸通りのか？」

とりあえず、自分でもわかる店をあげてみる。

「あい。そーです」

本当に合っているのか微妙な返事だが、一応当たりらしいのでそこへ向かうことにする。

タクシーの運転手に行き先を告げてる間に、そのまま俺に身体を預け寄りかかってくる。

こりゃ寝るのも時間の問題だな。困った。

「寝るな！ そうだ、鍵……鍵はどこだ？ 今から出しとけ！」
寝ると厄介なので揺すりながら起こしてみる。

「はい！ 主任これです」

鞆から取り出した鍵は直径五センチもある指輪のキーホルダーが付いていた。その輪っかに人差し指を入れ、俺の目の前でプラプラと鍵を揺らす。

手を出して受け取ろうとすると、スッと自分の手の中に隠した。

「おい。貸せ！」

「うふふ。キスしてくれたらあげます」

「はあ？」

相原は大きな指輪を指に嵌め、芸能人の婚約会見みたいに顔の横に手を添えてふざけて遊びだした。

仕事モードの頭を維持しようと必死な俺の気も知らないで、キスしろだと？

「キスするだけじゃつまんない。主任からもキスして？」

子供っぽいふざけてた口調から一転、急に妖艶な雰囲気漂わせた相原がいた。

「……」

甘ったるい声で何を言い出すんだ？

目を閉じてこっち向くな。

おい！ 運転手のおっさんもチラチラこっち見んなよ！
バックミラーで見てるだろ！

「何アホなこと言ってる。んなこと言っていると、ここに置いて帰るぞ」

「ええ〜！ ヤダ！ ヤダ！！」
また、元の子供っぽい口調に戻り駄々をこねる。

「……じゃあ、私からしちやおうかな？」

って顔が近づいてきたので、避けた。

……が、その変貌に戸惑い一瞬反応が遅れた。それになんせ狭い車内だ、避けきれず首元に唇があたる。

さっき飲んだときに、ネクタイを外してしまったので首元がから空きだった。

有ろう事か相原はそのまま吸い付いた。

うわあ。ゾクゾクとしてカツと血の巡りが良くなる。

違うスイッチが入りそうになり、急いで肩を掴んで引き離す。

「あ！ キスマークだー。すごい、こんなに簡単に付くんだ」
えへ。っと笑いながらそう言った直後、崩れるように腕に抱きつ
いたまま相原は眠りに入った。

っておい！ 寝るな。

マジかよ……。

直ぐに揺すって起こそうと試みるが、まったく無反応だった。
取り合えず力の抜けた手の中から鍵を取り出し、自分のポケット
に仕舞い一息吐く。

先ほどまでとは打って変わって彼女が眠り車内は静寂に包まれている。

抱きつかれた左側に彼女の体温を感じるが目を向けることが出来ず、無意味に車窓を眺める。

窓ガラスが夜の闇で鏡のように俺の姿を映し出す。
女に抱きつかれた男の姿。……まるで自分じゃないようだ。

視線が一か所で止まる。

それは、先ほど相原の唇が当たった場所。
映し出された色味のない姿でも、小さな影が見える。

キスマークってどうするんだよ！！ 明日も仕事だぞ！

この位置じゃネクタイしても見えるか？ 微妙だな？

あー。頭痛い。

小さくため息を吐いて、寝てしまった相原を横目に流れていく街並みに視線を戻した。

「お客さん。着きました」

程なくしてタクシーが目的地へと辿り着いた。

相原を抱えて降りると目の前にアパートが二軒建っていた。

真っ暗な中アパートの入り口を照らす蛍光灯だけが、白っぽい外壁を照らしている。

二階建てで中央に階段があり階段をはさんで左右に一部屋ずつある。その建物が二軒並んで建っている。一般的にアパートと言って思い浮かべる建築物と相違ないだろう。

ここしかないよな。

あれ？ 何号室だ？ 部屋が分からん。
仕方なしに郵便受けを見ると、八軒の内『相原』と書いてあるのは一軒。二〇二号室だった。

さつき相原から奪った鍵をゆっくりと回す。するとカチャっ小さな音がして無事に開いた。

鍵が開いた瞬間ホツとした。これで鍵が開かなかったら真夜中に他人の家を物色してる窃盗犯になりかねない。

勝手に開けて悪いとは思ったが、本人は夢の中だし時間も時間も騒いだら周りの家に迷惑だろう。

部屋に入るとワンルームのいたってシンプルなつくりの部屋だった。

迷うほど部屋も無いのでとりあえず目に付いたベッドに相原を寝かせ、一息吐く間もなく急いで部屋から出た。

いくら部下だと自分に言い聞かせても、こんな時間に女と二人きりの密室でいるのは危険だ。それも先ほどあんなにキスしてきた相手だ。このまま部屋にいたら一分もしないで襲い掛かるだろう。

酒を飲んでるのに理性が効いてる自分を褒めたいぐらいだ。

鍵を掛け、ふと手にある鍵を見つめる。

この鍵どうする？

この場合、選択肢は二つ。

鍵を掛けた状態で、鍵を持ち帰り明日の朝、早めに相原の部屋まで来る。

もう一つは、このままここで夜を明かす。

……後者はねーな。

たぶんそのまま五分ぐらい玄関の前で悩んだと思う。

そしてとつた行動は……もう一度ドアを開け、ドアの新聞受けを開いた状態にして、ドアと鍵を閉め、鍵を新聞受けから中へ落とすという方法。これなら朝起きた相原が鍵に気が付くだろうし、新聞受けから手を伸ばしても鍵は取れないから安心だろう。しかし、まるで殺人現場で密室を作っているようで嫌な気持ちになる。

相原の家は何気に、俺のマンションの近くだった。
目の前のハニーマーケットも俺も良く利用するところだ。だからタクシーでも店名を思い出せてのだが。

ここからなら歩いても五分ぐらいだ。

熱くなった体を覚ましながら、歩いた。
夜風が気持ちよく感じ、少しずつ頭が冴えてきた。

歩きながら今日の出来事を思い返す。
唇が触れたときの、柔らかさが今の生々しく感じられる。

相原は部下だと頭で理解していても、体が目の前の女を意識していた。

寝ている女に何かするなんてモラルに反することが出来ずに何とか理性が勝ったけど、キスを迫ってきたのが密室で寝てなかったらアウトだな。

家に着いたときには既に疲労困憊で、スーツも脱がずため息と共にベッドへ雪崩れ込んだ。

「すっげー疲れた。まさか相原があんなになるとは……」

最後にキスされた首元がまだ熱を帯びている。
食事の時の笑顔が可愛かった相原とキスを迫ってきた妖艶な相原

が交互に俺に笑いかける。

『明日どんな顔して会えばいいんだ？』なんて初恋に悩む中坊み
たいな事を考えながら、睡魔に耐え切れず、眠りに就いた。

10・キスマーク!? く書side

「主任、おはようございます。昨日はお疲れ様でした」
朝一番。すでにデスクに向かい仕事をしていた森崎主任に挨拶をした。

普段と変わらない挨拶をしたが、帰ってきた返事はいつもと同じじゃなかった。

「ん。……ああ。お、おはよう……」

ん？ いつも朝から生き生きと仕事してる主任がちょっとおかしい？

毎朝ちゃんと顔見て挨拶を返してくれるのに、こつちをまともに見ずに目を反らし少し顔が頬が赤い気がする。

「顔赤いですけど大丈夫ですか？ 熱でもあります？」

近寄って下から顔を覗き込んだら、驚いて後ろに一步跳ね退いて立ち上がった。その反動でローラーの付いた椅子だけが後ろへ流れてキャビネットに軽く当たり止まる。

その大げさな驚き方に私の動きが止まる。

そんなに驚かせることしたかな？ 嫌がられてるみたいで、ちょっとへこむよ。

「いや。何でもない、大丈夫だ。気にしないでいい」

主任はそのまま後ろにあるキャビネットのガラス戸を開き、分厚いバインダーを取り出し、パラパラと資料を眺めるが、流して見ているだけみたい。

しかも、そのバインダーって今の仕事とは無関係では？

動きもぎこちないし、何かがおかしい……。

やっぱり、熱があるのかな？

昨日遅くまで仕事してたし、その後飲みに行っちゃったから風邪でも引いたのかな？

……まさか、私がなにか仕出かした？

例えば、寒い夜中に頭から水掛けたりとか……流石に無いよね……？

私は、昨日の事をあまり覚えていなかった。

残業をしたのは覚えてる。そのあと飲み屋でごはん食べて……あれ？ どうしたわけ？

笑ってる主任の顔が浮かぶから、二人して笑いながら楽しく話をしてたはず。

あとは、ビールを飲んだような……飲んだわけ？

あやふやな記憶を辿るが、覚えてないものは思い出せない。

まあ、たぶん食事の後、それなりの時間で自分の家に帰ってきてベッドで寝たのだろう。

玄関に鍵が転がっていたし服もそのままだったので、帰ってきて鍵を開けてすぐに寝てしまったようだ。それにしても記憶が無いほど酔っていても自分で帰ってこれるんだなあ、と感心してしまった。朝起きた時は、スッキリと目覚め二日酔いにもならずにいい気分だった。

立ち上がった主任は、私より背が高い。なので視線が自然と首辺りを見てしまう。

すると、きつちりと締めたネクタイから少しはみ出した赤い痣のようなものが見えた。

「あれ？ 主任、首元を虫に食われてます！ 薬ありますよ、使いますか？」

肩から下ろしたばかりの鞆から化粧ポーチを取り出し携帯用の小さな痒み止め軟膏を差し出した。

「え！？ ああ。いや、いらない」

言うが早いか、バインダーをキャビネットに素早く戻し踵を返して部屋から出て行った。

「？」

今のはなんだったのかな？

せっかく昨日少しフレンドリーになった気がしたのになあ。

主任、どこ行ったのかな？ 仕事始まりますよー。

朝礼ギリギリに戻ってきた主任は珍しくタバコの匂いがした。

主任タバコなんて吸うんだ。

今まで、そんな匂いとかしたことがなかったけど……。

不思議に思いながらもそのまま仕事が始まり、仕事中は普段と変わらない主任だった。

昼休みになり瑠璃ちゃんとランチに出た。

行先は、お財布だけを持って行ける近くの喫茶店。

レトロな雰囲気が入っていて、よく二人でランチに来る。軽

食も人気で隠れた名店といった感じ。

私は人気のナポリタンを、瑠璃ちゃんはローストチキン入りクラブハウスサンドのランチを頼んだ。

「ねーねー。今日の主任見た？ キスマーク付いてたでしょ？」

「え！？ キスマーク？」

聞き慣れない言葉に驚き大きな声を出してしまう。

声の大きさと内容に店内の人々が一斉に私を振り返り注目を集め

てしまった。

慌てて口を押さえ、小さく咳払いをして、もう一度瑠璃ちゃんに聞きなおした。

キスマーク？ そんなのあったかな？

だいたいキスマークなんて見たことないからどんなんだか分からないけど……。

たぶん、Yシャツに付けちゃうような口紅の痕だね？

「ほら、首元のとこ！」

首元？ なんかあつたつけ？

首を傾げていると、瑠璃ちゃんが自分の首元をトントンと指さす。その場所は今朝主任に虫刺されを指摘した場所だった。……まさかそれって、今朝見た痣のこと？

「ええ！？ あれってキスマークなんですか？ 主任に『虫刺されですか？』って聞いちゃいましたよ」

「何、言ってるの。どう見たってそうじゃない……蕾ちゃんもしかしてキスマークとかわかんない？」

「ええ。付けられたことも、付けたこともないです！」

「あはは！ えばるところ？ いやー。モテルのに女の影がなかったけど、ついに女が出来たかー」

オンナ…… おんな？ 女！？

キスマークって女がいなきゃ付かないよね？

「彼女……ですかね？」

「どうだろうね。主任かぁ。私はあそこまで仕事人間は嫌だな。仕事が大事でも私も大事にして貰いたい。あれだけいい男なのに、ワーカーホリックはいただけない。もったいないよねー！」

瑠璃ちゃんは肩肘付いて、運ばれてきたアイスティーのストローをぐるりと回す。

確かにもつたいない。独身男性の中でもかなり人気あるのに。仕事大好きって感じたものね。

恋人に『仕事と私どっちが大事なの？』って聞かれて『仕事』って即答しそう。

「あはは。ワーカーホリックって確かに働きすぎですよ。昨日も残業で十二時過ぎちゃいましたよ」

運ばれてきた料理に手を付けながら覚えている範囲で昨日の出来事を話す。

「え！ そんなに残業したの？ 二人つきりで？」

「そうなんです。でも、帰りにご飯ご馳走してもらいましたよ。…居酒屋でしたけど」

ぼんやりと昨夜の笑顔で話す主任の顔を思い出し、フッと口元が緩む。

「あれ？ 蕾ちゃん思い出し笑い？ なに思い出してんの？ しかし主任が二人つきりで食事なんて珍しい…あれ？ 夜まで一緒だったんだよね？ じゃあ、いつキスマークなんて付けたのかな？ 何か昨日の主任で変わった事なかった？」

「変わった事…ですか？ うーん。ああ。笑って食事してました！ あの笑顔見たから、私は幸せになれるはずですよ！」

「笑ってた！？ 主任が？ 営業スマイルとかじゃなくって？」

それを聞いた瑠璃ちゃんは、驚いた表情のまま口へは運ぼうとしていたパンを皿に戻した。

「主任お酒飲んだからかな？ 話が面白くって二人してゲラゲラ笑っちゃいました」

「へー。…すごいね蕾ちゃん」

ん？ なんか尊敬の眼差し出られてる？

「すごい……ですか？」

「いやー。そんなに笑らうって、主任がずいぶん心を許してるって事じゃない？」

心を許す？

警戒してれば、そんな表情は見せないけど、いつも一緒にいる部下に警戒はしないだろうしねー。

「そう……ですか？」

「そうだよ。素を見せてるって事でしょ？」

あれが素なのかな？

いつもの大人っぽい雰囲気よりも、どこことなく少年っぽい感じはしたかな。

「確かに会社の顔とは違ってました」

笑顔は可愛かったな。なんて言ったら怒られる？

「もしかして蕾ちゃんがキスマーク付けた？ 主任と……オフィスラブ？」

ニヤッと笑って、こっちを見る。

もう。明らかに人事だと思って楽しんでますねー。

「なに言ってるんですか。付け方も知らないのに！ 瑠璃ちゃんはすぐに恋愛に結びつけ過ぎです」

「だってー。ありえるよ」

「私のタイプじゃないんですよ。主任は！」

「でも、笑顔がステキな人がタイプじゃなかった？」

「……笑顔はステキでした……けど……」

「……ほら、その笑顔を思い出して……」

いたずらっ子みたいな顔した瑠璃ちゃんが楽しそうに笑う。

「意識しちゃうからやめて下さい」

「あは。じゃあ意識するように暗示掛けちゃおうかな。『森崎主任を好きになる』って」

「やめて下さい！ 主任を好きになったところで、彼女いるんですよ？ 見込み無いですから……恋愛初心者にはハードル高すぎです」

「そう？ 案外行けるかもよ」！

「……瑠璃ちゃん！」

まったく……もう！

人のことだと思って唆さないで下さい。

「ふふふ。蕾ちゃんカワイイ！ もし進展したら教えてよね」

こうして瑠璃ちゃんにからかわれただけで、あっという間に昼休みは過ぎて行った。

11・気になる彼女 〈慎一 side〉

俺を悩ませる原因を作った魅惑の残業から一週間が経過した。
あの日から相原に目が行って仕方がない。

今まで自分がこんなに女を意識したことがあっただろうか。

あんなに気まずいと思って迎えたキスした翌朝。

相原は何事もなかったかのように「主任！ おはようございます」と挨拶をしてきた。

「ん。ああ。お、おはよう……」

こっちのほうで口ごもってしまった。

しかもまともに相原の顔が見れず、微かに顔が赤くなってる気がした。

普通ならそんなに気が付かない程度なのに、顔が赤いって心配そうに顔を覗き込んできた。

近くなったことで一瞬にして昨晚の記憶が蘇り、パツと後ろに飛び退いてしまった。

取り繕うように意味もなく棚から資料を取り出し、ページを捲るが内容が全く頭に入って来ない。それもそのはずこれは仕事に関係の無い資料だ。駄目だ、相原が見てるって思うだけで気分が落ち着かない。

しかも自分がつけたキスマークを指差し「蚊に刺されてます」「つてそりゃないだろ。」

居ても経っても居られず、喫煙ルームに逃げ込み、普段めったに

吸わないタバコに火を点けた。

タバコぐらいじゃ落ち着かないこともわかっているけど、相原を目の前に冷静で居られない。

せめて仕事が始まれば、仕事に集中できる気がして朝礼ギリギリまで時間を潰してた。

こんな現実逃避したって状況は変わらないんだが。

喫煙ルームのガラス窓に映る自分の姿。やっぱり目が行くのは首元。

うつ！ キスマークだよなコレ。

嫌な予感がする。

誰に何言われるかわかんねーな。

一応ネクタイをギリギリまで締めて、これで何とか隠れる。でも、動いてるうちに半分ぐらい見えてくるのだろう。

どうすんだよ。今日のプレゼン！

あそこの担当者、いい歳したオヤジの癖にお喋りで口軽いんだよな。

「合コン行かない？」とか誘ってくるし……。

絶対「森崎君もお盛んだね」とか言われる。言ってるのが目に浮かぶ。

あー。朝からテンションが下がる。

でも……今日を乗り切れば、しばらく重要な会議などの予定がない。

今度のクライアントは打合せがメールや電話で済ませられるところも多いはず。

これで重役会議なんて呼ばれたら、アウトだが……。

問題は社内の女どもだな。

この手の話は回るの早いからな。

はあー。もうため息しかでない。

そして、噂まみれの一日がスタートした。

案の定キスマークの噂は一日で社内を駆け抜け、朝には『主任の……見た？』なんて囁かれてたのが、昼には部長にまで『森崎君も隅に置けないね……』なんて言われ、そして一日が終わる頃には『情熱的な彼女が居る』ということで落ち着いたらしい。

そんな彼女が居るならあわせて欲しいものだ。

救いだっただのは、なんとかプレゼンには影響が出なかったことぐらいか。

そんな噂の中、キスマークを付けた張本人はまったくの平然と過ごしていた。

噂を耳にしてないのか？

それとも、自分は付けられてないから関係ないとも？

というか、あれは……忘れてるのか？

はっ！ 酒飲んで次の日には記憶がないとか、そうゆうことか……。

なんかショックだな。

キスしたのも覚えてるのは俺だけ！？

毎日のように一緒に仕事をしているのは一週間前と変わらない。俺の態度だって、おかしかったのは最初の一日はだけだろう。

というか、相原が意識してないのに一人だけ舞い上がって……空しいよな。

今まで女だっていたし、キスぐらい普通にしてた。たかが相手からされたからってキスしたぐらいで心奪われるもんか？

でも、実際に目が姿を追いかけて、耳が彼女の声を拾う。書類を渡す際に、指先が触れれば熱くジンジンと痺れる気がする。心奪われるってこんな状態の事を言うんだよな。

はあー。発展しそうもない、この想いはどこにぶつければ良いんだ？

しかし、考えてみれば今までの俺は自分からアプローチした経験がなかった。

過去の恋愛は女のほうから声を掛けてきて、嫌じゃなきゃそのまま付き合うような形ばかりだ。

自分から積極的に動いたことも無いから、デート一つ誘うのもなんて声を掛けるんだかわからない。

『夕飯食いに行かないか？』

これが一番シンプルだけど、人が多いところでは声を掛け辛い。だからって一人になるとこを狙うのも大変だ。まさか職場のフロアでは声を掛ける訳にもいかない。

『ちょっと飲みに行くの付き合えよ』

いや。本人は酒飲めないって言ってたよな。一緒に酒飲んだことは覚えてるのか？

『遅くなつたから送ってくよ』

残業や同行の後言うのか？

今まで、送つたこともないのに、突然おかしいよな？

『明日暇だつたら出掛けないか？』

いきなり休日に連れ出すのはリスク高い？

……なんか俺って情けねーな。

家が近所だつて分かつたんだから、偶然を装つて社外で捕まえる？
それってストーカーか？ ……だよな。

やばい。自分がどうしたいのか？ どうしたらいいのか？ 全然
分かん。

しかも部下つて断られた後が気まずいよな。

やっぱり手を出すべきじゃない？

だよな。社内の女に「会社は仕事するところだぞ！」って言うて
たのは……他でもない、俺だ。

この想いは封印するべき……なのだ。

「相原さん！ 今日この後予定あります？」

気が付くと経理の男が相原に話しかけている。

こいつは確か入社三年目ぐらいの男で、明るく社交的だと入社当
時から騒がれてたやつだ。

その上、親が銀行の重役とかで金持つてって高級車に乗ってるだ
とか、デートコースが有名ホテルの三ツ星レストランとか女を落
とすのが上手いって話だ。

「え？ えーっと。何の御用でしょうか？」

かしこまった態度で対応する相原。
チラッと斜め前の久住を見て、助けを求めているようだ。

「今日さ、飲み会があつて相原さんに会いたいつて言うヤツがいるんだ。よければ参加してよ！」

なんだと！ 俺の目の前で相原に男でも紹介するつもりか？
んなこと、俺が許さん！！

「おい！ まだ仕事だぞ。雑談なら後でしろ！」
思つてた以上に怒り心頭だったようで、出てきた声は低く怒りの籠つたものだった。

「あ。すみません。相原さん帰りに迎えに来るから……いいよね？」
経理男が軽く会釈して、小声で相原に約束を迫る。

相原が返事をしてないのに、勝手に迎えに来るだと？
自分の眉間に皺が寄り、眉がつり上がっていくのが分かる。

「残念だけど、今日私と買い物に行く予定なのよ。しかも彼女お酒飲めないからお酒の席は遠慮して」

久住が話に割って入って、そのまま仕事を続ける。
これ以上話を受け付けないというアピールだろう。
しかも、強引に会話の主導権を握る。

「ごめんなさい」と小さな声で相原も謝っている。
「いいよ。気にしないで、またね」と経理男が部屋を後にする。

相原が謝ることなんて何もないんだぞ。
だいたい『またね』だと？ 『また』なんて無い！！！！

怒り心頭だが、ちょっと待て。
付き合ってるわけでもないのに、俺にそんな事いう権利はないだ
ろ……。

でも、これは嫉妬だ。

こんなの部下に対する気持ちじゃない。

自分でも、もう手遅れだということに気が付いている。

今の自分には封印なんて出来るのだろうか？

そして、また相原を見つめてる。

自然とため息がこぼれ視線をモニターへ戻すと、視界の端で久住
がこつちを見ている気がする。

他のヤツに俺の気持ちが見破られてもアウトだが、選りにも選つ
て相原と仲のいい久住か。

なにか企むかのように口元が笑っている。

息の詰まるようなその視線から逃れるように、少し席をはずす。
もちろん席を外す用件は仕事。

この企画部へ渡す書類は、何も自分で届けるほどのものでもない
のだが。

こんなんじゃない、仕事にならん。

いつそダメならダメで潔く振られたほうが、仕事に専念できそう
だ。

12・偽恋愛教科書 〈書side〉

帰宅後すぐに夕食の準備に取り掛かった。

今日はクリームシチュー。鍋一つで出来るメニューは一人暮らしの私には楽なメニューのほうだ。圧力鍋を使うので時間短縮だし大変便利。

一口大に切った材料を小さめの圧力鍋に入れ炒めた後、水を足し火を付け圧がかかるまで中火をキープ。圧がかかったら弱火で二分後に火を止める。

その間にサラダの準備。キャベツを丸のままスライサーで削りザルの中へ、キュウリも同じザルへスライサーで千切りにして水洗いした後、水気を切りガラスのボールへ。そのボールへ缶詰のツナ&コーンを半分足して、コールスローのドレッシングで和える。

ちょうどサラダの準備が終わる頃、シチュー鍋の火を止める。

圧が抜ける間にシャワーを浴び、部屋着に着替えた。

鍋の蓋を開けルーを割り入れ弱火で煮込みとろみを付け、皿に盛る。

いただきますと手を合わせ、夕食タイムが始まった。

テーブルには帰りにコンビニで買ったファッション紙が置いてあり、パラパラとページを捲り巻末の『恋の十二星座星占い』のページを開く。

「さてさて、今月の星占いはどうかな？」

これは恋に纏わるアドバイスが載ってる星占いな。

シチューを口に運びながら、雑誌に顔を近づけた。

「今月の天秤座は……普段気にならない人が気になる。知らない一

面を知ってギャップを魅力に感じ恋に落ちるかー。恋を発展させるラッキーアイテムはピンクのスカート」

ピンクのスカートね。……じゃ、明日着て行こう。

明日は久しぶりの女子会という名の飲み会だ。

私が心置きなく外でお酒を飲める唯一の機会だもの楽しまなくてはならない。

少しは飲んでも大丈夫なところを見せて、飲む量を少し増やしてくれないかな？

友達の中で姉御肌の煌李は甘くないので、中々飲ませてくれない。『文句あるの？』って言われると言えないんだけどね。だって言えないだけ迷惑かけてるから。

また、雑誌に視線を落とし、続きを読み出す。

「恋はジェットコースターのように走り出したら止まらない。たまには勢いに身を任せるのも吉」

はあー。そんな恋がしたいよー。

走り出すレールすら見えないのに……。

前に恋愛で失敗した私は「お手本の無いものは苦手」と、いつも恋愛から逃げてた。

恋人が欲しくないわけじゃないんだけど、どうも奥手になりがち。

仕事なら自信持って積極的に動けるのになー。

夕飯もすっかり食べ終わり、食器を片付けながら溜息を零す。

この間、違う課の先輩が社食で泣いていた。

瑠璃ちゃんの同期らしく横で少し話を聞いたけど、なんて声を掛ければいいのかもわからずに『元気出してください』としか言えなかった。

『恋愛って生き物なんだね』なんて私には理解できない名言を残し、仕事へ戻って行った。

生き物って何？ どうゆう意味？ 誰か恋愛マニュアルを貸して下さい。

『生き物』って索引で調べたら意味分かるかな。

「二人で毎日世話しないと死んじゃうのよ。恋って片思いでも育つけど、恋愛は相手あつてのものじゃない。暗くてじめじめしたところで放って置くと腐るしね……。あの二人は結構マンネリ化してたから……」

社食からの帰りに瑠璃ちゃんが教えてくれたのは本当に生き物っぽく説明だった。

身近に恋愛マニュアルがあつて良かった。

すみませんが『マンネリ』状態も教えてください。

まともに片思いすら出来てない私はまずそこから始めたほうがいいのだろうか。

片思い？ 誰に？ ……恋するにも思い浮かぶ人物がまったくいないって悲しい。

最近気になったのは……主任！？

いやいや。瑠璃ちゃんが暗示とか言うから気になっちゃっただけだよ。

もう、何も考えない！

そうだ、この間みんなにもらった『恋愛マニュアル』を読もう。

そして、恋する乙女の心でも学ぼう。

恋愛が苦手でマニュアル依存症なのを知っている親友三人にバ―

スディプレゼントを二週間前に貰ったばかり。

誕生日会ではプレゼントを選ぶ三人が一つのテーマを決め、買い物をする。

今までは煌李の十八歳のバースデイは『+五歳 大人の女セット』だったし、くるみの二十一歳の時は『大人カワイイ演出小物』、去年の美羽のテーマは『勝負下着セット』で私はベビードールとかあげたんだよね。

私のバースディプレゼントテーマは『恋をさせよう！ 恋愛マニュアル特集』らしい。

いつもは会ってプレゼントをもらうのに、誕生日当日に都合が合わずにプレゼントが贈られてきて、電話で『おめでとう』って言うてもらった。

実際に会うのは明日に迫った女子会でってことになった。

くるみからは貰ったのは“世界的に有名な恋愛小説レーベル”の作品で、御曹司やシークとのシンデレラストーリーが多かった。一番身近に感じたのは主人公が秘書でヒーローは会社社長とか。自分がOLだからかな？

どこにそんなお金持ちばかり居るのか？ 疑問にも思ったが、恋愛下手な主人公には共感した。

でも、いつか王子様が……と現実離れた事は望めなかった。王子様じゃなくても、いつでも出会いは転がってるって思えばいいのかな？

ドラマチックな展開は、普通にも起こること？
ダメだ、わかんないや。

美羽からは “少女向けコミック” で、学校の先生と生徒という組み合わせや同じクラスのS系男子と付き合う内容だった。

お話としては楽しめたが、自分の年齢が学生を超えてしまつて、ピンとこないのと、先生つてどうなの？

優しくってカッコよければ考えるけど、自分の学生時代には年配のオジサンばかりだったのでどうもリアルに想像できない。

これを読んで学んだのは、もっと学生時代に色々な人と付き合うと良かったってことかな？

今まで一人しか付き合わなかったし、最終的に振られたのが尾を引きずっている。

告白されたこともあったけど、自分の好きな人とは付き合わなかったのがいけない？

『愛する』だけじゃなく、『愛される』も経験した方が良かったんだね。

煌李からはなんと “男女の事情” のDVDだった。

郵送だつて分かつてから買ったのね！

友達の誕生日プレゼントでコレはないよね？

みんなで会つてその場で包み開けたら大惨事だよ！

内容は…… オフィスで上司とだったり、女性から男の人を襲うような内容でいきなりこんな事ないだろう！ と思いながらも、ほとんど見ちゃった。

女性向きって書いてあつてリアルに肌の露出は無いんだけど……それでもねー！

だいたい、私が知りたいのは恋愛の仕方、これは……その後で
しょ？

しかも、ちょっと強烈なんだよ！ 体から始まる恋愛！？ っ
とりあえず初心者向けの恋愛がしたいよ。

しかもこのDVD相手が自分の上司で呼び名が『主任』なの……
だから森崎主任の顔が浮かんでしまう。
慌てて頭を振って妄想を外に追い出す。

会社で毎日会う男の人に置き換えちゃダメでしょ！
ダメダメ仕事中に思い出したら大変だよ！

……でも、あの人Hするんだよね。
想像できない。

でも、主任ってイイ体してるって話だよ……？

ふと、DVDの男の人が森崎主任に見えた。
！！！！

そして相手は……？ 私！？
違う！ そんな事ない！！！！
だからそんな妄想しちゃ駄目。絶対ダメ！

DVDを止め、テレビも消す。
ってコレは絶対に恋愛マニュアルじゃないよ！ 煌李！！

本よ。本！ 本を読まなきゃ。
大丈夫。本の世界に浸れば、今の妄想は消えるはず！

頭の中のリアルな男女の事情を追い出すべく頭を振る。

ふーっと一息吐いて閉じていた小説を開き、栞を挟んであるページから読み進める。

で。今、読んでいるのは、くるみからもらった “色褪せたウエディングドレス” という小説で、契約結婚の話だった。

主人公ローズは十八歳の天涯孤独で両親の残した借金を背負うド貧乏。

その上ドジなところもあり、ウエイトレスの仕事先でもお客様にコーヒーを頭から掛けてしまう。

即刻解雇され路頭に迷いそうなところを、カフェで居合わせた三十八歳の会社社長の美形でダンディなダニエルに救われ、契約結婚を条件に借金の肩代わりしてもらう。

しかし、二十歳年上な上に何人もの女の影が付きまとう夫。偽りの生活の中でダニエルを愛してしまったローズは、黙って家を出る。

ローズが姿を消して初めて愛に気づくダニエル。

この後もすれ違いにすれ違いを重ね、……って気が付くと夢中で読んでた。

あー、ヤバ！ もうこんな時間。明日は仕事の後女子会なのに！今日は早く寝よ！

そして、そのまま寝たもんだから……煌李がくれたDVDが入りっぱなしって事もすっかり忘れちゃったの。

13・女子会 1 〈side〉

親友三人との女子会、当日。

待ち合わせは仕事が終わった後だが、久々の再会ということで朝から浮かれ落ち着かなかった。

それでも仕事はテキパキとこなし、あつという間に定時まで残り三十分となった。

この分だと残業もなく仕事も無事に終わりそう。

この間の残業はさすがに長かった。午前様だもの、長いよね。でも、『自分の仕事はきっちりこなしたい』そう思って自分から願いだした。

それに少しずつ築いた信頼を壊したくないし、冗談でも『仕事ほっぽり出して帰るのか？』って言われたくなかった。

長時間勤務で疲れはしたが、仕事が終わった後には二人でやり遂げた連帯感や充実感で心が満ちていた。

残業はこれまでもあったけど今回は主任の行動が違ってた。

仕事中にコーヒーを御馳走してもらっただけでも驚きなのに、まさか一緒に食事する日が来るとは思わなかった。

笑いながら話す姿を初めて見たし、笑顔が可愛かったのを思い出すとなんだか照れてしまう。

はつきり覚えてるわけじゃないけど、ところどころ楽しかったのは覚えてる。

普段は仕事の鬼だけどそれが彼の全てじゃないんだよね。

厳しい事を言っても、人として正しい事をしてるんだものね。

全然『鬼』じゃないオフの顔を垣間見て、とたんに親近感が沸いたのは事実だった。

少し主任に対する考えを改めた方がいいかも。

日頃の行いが良かったのか無事に定時を迎えられた。この日はやはり残業の無かったことに感謝した。

「お疲れ様です」と同僚たちに挨拶をしてロッカーへ急ぐ。

普段は地味なリクルートスーツしか着ない私が、珍しくガールズテイスト溢れる服にお着替え。

オフホワイトのチュニツクは胸元にギャザーが寄せてあつてふんわりしてる。

あと、忘れちゃいけないピンクのティアドスカート。これはもちろん星占いに載っていた今月のラッキーアイテム！ ミニス力なんて普段履かないから足がスースーするけど、これで良いことがあるならなんてことない。

パンプスもピンクのリボン付きで全身『女の子』スタイル。

メイクだっていつもはナチュラルだけど、気合い入れて服に合わせしてみた。

メイクに少し時間が掛かり気が付いたら思っていたよりも時間が経っていた。

時間を気にして腕時計を見たままロッカールームから出たところいきなり目の前に人が飛び出してきた。あわやぶつかるかと思うほど近くなり吃驚して顔を上げると、そこにいたのは森崎主任だった。

普段見られない主任の超どアップ。余りの近さにドキリとして目を見たままフリーズしてしまった。

しかも、こんな時なのに一瞬にして、昨日のDVDを見たときの妄想が蘇ってしまう。

その瞬間に顔が赤くなり、頭が沸騰状態になる。触らなくたって顔が熱いのがわかる。

だって、その妄想が主任とオフィスで抱き合って、キスをして、そして……コレ以上は私の口からは言えません。

普段ロッカールームとかじゃ絶対に会わないのに、何でこんな時に限って会っちゃうの？

しかも、私ったら何で仕事中には全く思い出さなかった妄想を、今になって思い出しちゃうのかな。

変な顔してないかな、心配になり少し俯く。

恥ずかしくって顔なんて見れないよ。

「相原。今日一緒にメシに行かないか……？」

頭上から聞こえてきた、内容にも吃驚した。

え？ 今日……これから？ 一緒に……ご飯！？

話しながらも主任は私の頭からつま先まで確認している様だ。

未だに顔が赤いよね？ 恥ずかしい……。

内容を噛み砕く前に、混乱したまま「あの、今日はちょっと……」

と言ったけど、どこ見ていいのかわからず目が泳いでしまう。

だって、恥ずかしさでまともに顔すら見れない。

主任は少し、時間にして一〇二秒考え込むような間があり、
「あー、悪い。今のは忘れてくれ」と少し大きな声を出して、急ぎ足でその場を後にした。

今のは……なんだったの？

残業も無い日にご飯って？ 残業で遅くなって二人しか居ないならわかるけど。

もしかしてデートのお誘いだったとか？ ……まさかねー。
ないない。……自分で言ってって寂しくなっちゃう。

主任の行動が理解できなかったが、待ち合わせに遅れそうなので、そのまま会社を出た。

みんなが社会人となった今、なかなか時間の調整が難しくなった。元々は私の誕生日に会う予定があったが、二週間伸び今日になった。

定期的に行ってる女子会は実に半年ぶりだった。

「あ！ 蕾〜！ こっちこっち！」

時間ちょうどに着いた待ち合わせ場所には、手を振っているくろみの姿があった。

近くへ駆け寄るとすでに三人が揃っていた。

「お待たせ！」

「いやー、会うのは久しぶりだね！」

みんなと挨拶を交わし、四人で近くの居酒屋へ歩き出した。

「蕾、遅れたけど誕生日おめでとう！」

「みんなありがとう〜！ あっ、そうだ。煌李、この間のプレゼントトちよつと問題だよ！」

先日の誕生日プレゼントをみんなに報告するとくるみが「煌李ならやりかねない」と笑った。

久々に会えるのが嬉しくて、飲む前からかなりハイテンションな

再会となった。

お目当ての居酒屋では、ノンアルコールビールを注文して乾杯した。アルコール制限のある私は最初の一杯からアルコールは勿体ない気がして、後に取っておいた。

でも、店員さんが間違ったのか飲んだら、アルコールが入ってた。割引券を使ってビールが安くなってるって、最初の一杯はノンアルコールビールと価格も同じだったからかな？

トイレに行くフリをして、店員さんには一応言っておいたけど、友達にはもちろんバラさなかった。

「で。最近どうなの？ 誰かカッコイイ人とか、気になる人は居ないの？」

煌李がジョッキ片手にみんなの顔を見渡す。

女子会に恋バナは付き物だね。

「はい。私、彼氏が出来ました！」と満面の笑みを見せたのは美羽。

「うわー。先越されたー！」と手で顔を覆う、くるみ。

「誰々？ どんな人？」私も興味津々だ。

「もしかして、ちょっと気になってるって言ってた彼？」

あれ？ 煌李なんか知ってるの？

すると、美羽が煌李に恋愛相談をしたことが判明した。私は恋愛偏差値が低いし、くるみは合コンばかりで中々彼氏が出来ないと嘆いてる。そう考えると確かにこのメンバーの中で恋愛で相談出来るのは煌李しか居ない。

「そうそう。会社の同期で……松垣くんっていうの。この間デートに誘われちゃって」

そう頬笑みながら語る美羽は幸せそのもの。

ふんわりとやさしい空気を纏った美羽。恋してるって綺麗になるんだね。

近くにいるだけで、恋のご利益がありそうな気までしてくるよ。

恋愛に苦手意識のある私は、身近にある恋愛見本に食いついた。参考になるところは全部吸収しなきゃ！

「デートって何処行つたの？」

「どっちから告白したの？」

「付き合ってたのくらい？」

って質問攻め。

タジタジの美羽に構わず『先生！　お願い！』と教えを乞う。

「写真ないの？　見たーい！」

「携帯の写メなら……あるけど……恥ずかしいなー」

照れながらも怖ず怖ずと差し出す携帯をくるみが奪い取り三人で覗き込んだ。フリップを開くとスーツ姿のさわやか好青年が待ち受け画面で微笑んでいた。

美羽と並んでるところを想像するとお似合いのカップルだ。

「……イケメンだー！！　カッコイイ」

いいな。彼氏の写真を待ち受けだって！

これこそ付き合ってるって感じ！

「恥ずかしいからもうおしまい」と、携帯を鞆に急いで仕舞った美羽は、赤い顔を隠す様にそのまま両手でジョッキを持ちビールに口を付けた。

「美羽ずるーい！　こんなイケメン捕まえてー！　私にも彼の友達

でいいから紹介して！」

くるみが目を輝かせて美羽に迫る。

あまりに真剣なくなるみの態度に私と煌李が目を合わせて笑う。

「名前は？　なんて呼んでるの？」

「ひがきはやく松垣隼人。同期だし歳も同じだから、隼人ってそのまま呼んでるよ」

名前で呼ぶのなんて経験したことないよ。昔いた彼氏はまだ高校生だったから名字に君付けだったし、私の恋愛スキルはかなり低いからすっごい懂れる。

「美羽の同僚と合コンしよう！　彼の友達の良い友達でもいいから紹介して〜！」

未だに諦めきれず、どうにかして合コンへ持っていこうとするくるみ。恋愛にこれだけ積極的になれるくるみが羨ましくもあった。

「声だけでも聞きたい！　今、電話してみよう〜！」

「じゃ、帰り迎えに来てもらいなよ、その時に顔を拝ませてもらう〜！」

いつもはブレーキ役の煌李までくるみに加勢してしまっっては、収拾がつかない。

「あはは。あー。熱い熱い……」って手で顔を仰いでる美羽が話を打ち切るように「すみません。カシスソーダーっ」って頼んだ。

その時、一緒に初アルコールのフリして「私、日本酒ね！」と頼んじやった。

これがこの夜の間違いの始まりだったんだけどね……。

14・女子会 2 〽 蕾 side 〽

「蕾は？ どう？ 会社でカッコイイ人とかいた？」くるみの目がキラキラ輝いている。

「カッコイイと言えば、上司はカッコイイよ……森崎主任って言うんだ。普段は仕事の鬼だけど……」

そう、カッコイイんだよ。主任。

今まで、周りが『カッコイイ』って言うってても、そんなに気にしなかったけど。今日だって、ロッカールームでのニアミスで驚くほど顔が近いとき、ドキドキしちゃったよ。

「普段は……って？ 普段じゃないと見ちゃった？」

「え！？ うーん。この間残業で遅くまで仕事してて、帰りにご飯食べたんだけど、仕事してる厳しい顔じゃなくって、笑ってご飯食べてて、話もしやすくて……」

受け答えの合間に、チビチビ舐めるように日本酒を飲んでいる。

ああ、日本酒おいしいよ！ この香りがいいんだよ。

枳入りで、コップから溢れたお酒が枳にもたつぷり。サービスいいねココ！

「笑って？ 何？ 脈あり？」一段と輝きを増した、くるみの顔が近づく。

くるみ。ちつ近いよ。

「おおー！ 蕾が恋した？」

「やっと、恋の季節が来た？」

煌李と美羽まで食いついてくる。

「いや。そんな訳じゃないんだけど、今日もホントはご飯誘われち

やって。ちょっとドキドキしちゃった」

自分の恋バナなんてあまりしないから恥ずかしくなちゃって、のどが渴きからついついお酒に手が伸びてしまう。

「恋より友情優先?! なんて友達想いな」

「そんなことして後悔しても知らないよー! 一緒に食事に行けばもっと関係が進展したかもしれないのに」

進展? って……ないない。

主任とご飯に行ったって、どうにもならないよ。

「そこまでじゃないよ、それに上司だよ」

上司とは仕事先での関係なんだし、その上司と恋愛なんて考えられないでしょ?

「社会人になると身近な人物って会社関係ばかりじゃない? ……社内恋愛なんて珍しくないし。会社って先輩か同期か後輩しか居ないんだよ」

「そうそう、その先輩が上司だったって話でしょ? 普通だよー。普通」

「で……でも、主任には彼女がいるかも知れないし……。この間もココにキスマー……」

「ごによごによと小さな声で呟く。

ココにキスマーク……?」

自分の首元を指差して気が付いた。

ロッカールームでの急接近ですら近いのに、もっと近いんだよねリアルに想像したことなかったけど、あんなところにキスマークを付けるってとっても親密な行為だ。

ボン! っと、頭ん中に裸で抱き合う男女の画像が浮かぶ。

男性の顔は森崎主任。女性の顔は見えない。……でも……私じゃない誰かだ。主任はその女性を愛しむように優しく抱きしめ、見つめ合い唇を重ねる。

ドクン！ 急に胸が締め付けられ、急に動悸が激しくなった。嫌だ、そんな姿見たくない。

それでも頭の中では主任の姿が浮かぶ。

柔らかなキスの後、女性が男性の胸の抱かれ首筋へ唇が近づく。その女性に優しい笑顔を見せてる……それって、前に私に笑いかけてくれた笑顔と同じ？

なぜだろう、ムカムカとするものが胸に何か込み上げてくる。

私じゃない誰かに笑いかける主任をこれ以上見たくなくて、首をブンブンと振って妄想を掻き消そうとした。

妄想は消えたけど、振りすぎでちよつと頭がくらくらする。駄目、こんなんじゃ酒がまわるよ……。

「ふーん。そつか……じゃ、社内恋愛がタブーなら、合コンとか行く？」

くるみは、頭を振ったのを社内恋愛が嫌なのかと思ったみたいで、話が合コンに変わっている。

はぁー、また始まった。くるみは合コン大好きで、人数合わせで何回か付き合った。

でも、合コンは苦手。知らない人とフレンドリーに話すのは馴れ馴れしい感じがして好きじゃない。だって初めて会うのに名前で呼ばれて、お酒飲まずに合コンなんてキツイよね。それなのにノリが悪いと場の雰囲気壊すし。せめてお酒入れば楽しいんだろうけど。

くるみは盛り上げながらも飲酒してないか目を光らせてるし……。

「私の話はもういいよ。そう言うくるみはどうなの？」

とりあえず話を逸らしてみる。もうお酒のせいか主任のせいかわからないけど、頭が働かない。

「私？ そうそう、この間の合コンでね……」

そのままくるみの合コン談義に花が咲き、私の意識はまた主任のほうへ傾く。

今まで残業も多かったし平日に彼女と会うなんて出来なそうだけど、休日の主任なんて知らないもの。

どこで何してるんだろうか。

今になって、ご飯断った事がもったいない気がしてきた。

ううん。何考えてるの！ 前々からみんなと会つのを楽しみにしてたんだし、こっちが優先なのは当然だよ。

……なのになんでこんなに気分が沈んでゆくのか？ せっかく楽しみにしてた飲み会なのに……。

「ごめん。ちょっとトイレ」

気分を一新したくて、立ち上がった。狭い通路を抜け表示看板を頼りにトイレへ向かう。手をかけようとしたドアノブの上にある小さな窓が赤く使用中を告げていたので、仕方なしに廊下に立ち壁に寄りかかった。

ふと、一つのグループが目に残る。ガヤガヤと雑音も多いので詳しい声までは聞こえないけど、何かのゲームで盛り上がってるようだ。そんな中一組の男女が立ち上がり、いきなりキスをした。周りがキヤーとかヒューヒューと囁き立てるが、そんな声が聞こえなくなる。

実際に他人がキスしてるところなんて見たことないから吃驚したけど、それ以上に衝撃が走った。

あんなふうに主任も誰かとキスをする？

そうじゃなきゃ、キスマークなんて付かないんだよね？

今までのムカムカの比じゃないほど、胸が苦しくなる。

まるで、真っ赤な心臓を真っ黒な蛇が絡み付いてギューギューと締め上げているようだ。

なにこれ？ 今まで襲ったことのない胸の痛みに対応できなくて泣きそうになる。

「もう！ 知らない！」

「待ってよ早智ちゃん！」

廊下の奥のほうから声が聞こえ段々と大きくなる。

目を向けると一組のカップルがこちらへ向かって歩いてくる。

「私じゃなくってその女のところにでも行けば？」

「だーかーらー、ただの同僚だよ。でも嫉妬してる早智ちゃんもかわいいわねー！」

痴話喧嘩か？ と思い、足を引つ込め通り道を広くする。

ん？ なんだろう。なんか今の言葉に引っかかりを覚える。

「付いてこないで！ もう好きじゃないんだから！」

「またまたー！ 好きだから嫉妬するんですよ？」

刺々しい言葉を吐く彼女と、ヘラヘラと笑いながら彼女と追いかける男。

そんな二人が真横を通り過ぎ、そのまま声が聞こえなくなってゆく。

嫉妬……？

今、嫉妬って言うてたよね？

『好き』だから『嫉妬』する……。

好きと嫉妬はセツトなの？

『好き』 〓 『嫉妬』 ってこと？

このモヤモヤってまさしく嫉妬。

『誰』が？ 『誰』に……？

『私』が主任の『彼女』に嫉妬してる。

それって好きって事？

主任が好き？

そうか……私、主任のことが好きなんだ……。

自分の中で納得できる答えを見つけたからなのか心に絡みつく蛇は姿を消して、すつきりとした気持ちになる。

あの日から、社内の誰も知らないような笑顔の主任が、ずっと心にいたの。それって恋なんだよね？

なんだ私も片思い出来てるんじゃない？

キスマークを付けるような彼女がいる主任だから、この恋が発展することはないかもしれないけど……それでも自分が変わった気がする。

これって恋愛の第一歩だよね。まだまだゆっくりしか進めないけど、自分の気持ちに気が付いただけでも進歩だよ！

トイレから戻る頃には、自然と笑顔が出て嬉しくなってグラスに残ってた日本酒をグイッと一気に煽った。あー。楽しくなったきた！　なんかとっても気分が良くなってきた♪　お酒が回ってきたのかな？

女子トークは恋の話で大盛り上がり！

今度は煌李の恋バナへ移っていった。でも、煌李の恋は明るく楽しいものじゃなかった。

仕事先で知り合った妻子ある男性に惹かれているという。でも奥さんや子供とも面識があり、家庭を壊すことなんて出来ないのだと。「そこまで悪女になりきれほど愛してもいないのよ……それに、たぶん妻と子供を大事にしてる姿に惹かれてるから、私に靡くようにじゃ幻滅するんだけど……それにまだ片思いだからブレーキが利くのよ」

たばこを吹かしながら寂しそうに笑う煌李は綺麗だった。

「私の話なんかしたら、しんみりして嫌なのよ……」

「でも、辛い恋だからこそ、友達に話したいとかないの？」

「そうだね。今話せて少しスッキリした」

ニッコリと微笑む煌李。

顔見てたら、煌李はいい子だよ、いい女だよって伝えたくって無性にキスしたくなってきた。

チュツ。気が付いたら煌李の頬にキスしてた。

思い余って、行動に出てたらしい。

「ちょっと！　蕾、酔ってるの？　私は百合に興味ないわよ！」
なんて怒られても、ダメージなし。

かなり酔いが回ってるらしい。
でも、キスしたらテンションがグッと上がってきた！

「あーん。煌李に怒られた」って抱きついた美羽にもキスした。
「コラコラ。美羽の彼氏に怒られるぞ！ もう！ なんて一杯でこんなに酔ってるの？」

くるみに無理矢理引き離される。

「他人に迷惑掛けないうちに、出るよ！」
煌李に腕を引っ張られ、美羽がまとめて会計をしてくれてるみたい。

飲んでいた店は入り口が狭く、一人ずつ縦に並ばないと通れない作りだった。

その通路を「いっちばーん！」と言いながら先頭を切って走り出した。

手でスライド式の扉を開き、外に出た瞬間。入り口の段差に躓き通りがかりの人に体当たりというか抱きついてしまった。

「わっ！ ご、ごめ……ん……さ……さ……」

顔をあげるとそこには驚いた顔の森崎主任がいた。

夢でも見てるのかな……。本当に本物？

主任の事を話していたからかな、無性に主任に会いたかったの……。

息遣いもわかるほど近くにある顔に見惚れてしまう。その中でも目の前の唇から目が離れない。

お願い。他の女になんてキスしないで……。
お願い。他の女になんてキスしないで……。

15・酒乱、再び 1 〈慎一side〉

帰り道を一人歩いているはずだった。

なんでこんなことになったんだ！？

いきなり現れた相原に抱きつかれ気が付いた時には唇が合わさり、思考が停止してしまった。

……よし。とりあえず、今日の出来事を一から思い返してみよう。

帰り際、最近気になって仕方がない相原をメシに誘った。

悶々と悩むくらいなら、一言『好きだ』と告げて、駄目でもバツサリ切りたい。

そのためにはデートだと思い、先日相原が久住と今度行きたいと言っていたレストランを予約した。

定時を向かえ帰り支度をしている彼女に声を掛けるべく後を追った。

急な誘いだし、少しでも不審に思われたらダメだろう……。自然な感じで声を掛けなければ。

そのためにも偶然を装って……、軽く聞こえるように心掛けて……。

ロッカールームへ姿を消した彼女を入口付近で待っていたのだが、廊下を通る女子社員の視線が気になり用も無く廊下を行ったり来たりしていた。場所を変えて待とうとも思ったが、ここで捕まえられなければ全てが失敗しそうな気がして動けなかった。

待ち伏せなんて……彼女が嫌がるだろうか？

そりゃそうだよな。今までの自分だってこんなことされたら嫌がってたはずだ。

……やっぱり、やめたほうがいいか？

相原のことになると自分が驚くほど、弱気になる。

しかし、いつまで経っても自分が動かなきゃ関係は変わらないだろう。

今動かなきゃいつまでも動けない。

どれだけ廊下を往復したか分からないがロッカールームの前を横切った時、同時に扉が開き中から女性が飛び出してきた。

危ない！　　と思ったが、寸でのところで止まったため、ぶつからずに済んだ。

ロッカーから出てきた女性は、女性らしい可愛い格好をしていた。一歩離れ道を開けようと思っていたのだが、その彼女が顔を上げた瞬間、驚愕し動けなくなってしまった。

そこには今まで見たこともない服に身を包んだ相原がいた。

本当に……相原か？

ここで相原を待っていたのだから、彼女がここにいることに不思議はない。だがいつもと違う姿に面喰ってしまう。

抱きしめられそうなほど近い距離でまじまじと見つめる。彼女の髪から漂う甘い香りに思わず抱きしめてしまいそうになり、ハッと我に返る。

本来の目的を忘れて、見惚れている場合じゃなかった。

「相原。今日一緒にメシに行かないか……？」

そう言いながらも彼女の姿をもう一度確認する。

いつものモノトーンのパンツスーツとかではなく白やピンク色の

ふわふわとした服で靴までピンク色だ。化粧も普段とは全然違う。そんな服にわざわざ着替えた意味を考えてしまう。

「あの、今日はちよつと……」

いつも堂々としている相原の目が泳いで動揺している。

そして、驚いたことに赤い顔して照れ笑いし、恥ずかしそうに俯いたのだ。

いかにもな女の子の仕草に『かわいいじゃねーか』と思いながらも、この状況から考えて『彼女は男とデートなのだ』という結論を出した。

思い起こせば珍しく慌てて帰り支度をしていたし、チラチラと時計を気にしているそぶりもあった。

とたんに心が冷える。

フリーズした体を奮い立たせて「あー、悪い。今のは忘れてくれ」と、その場を逃げるように離れた。

一瞬にして失恋か？

彼氏がいないと言っていた訳じゃないが残業も嫌がらずにするから、勝手に居ないと思い込んでいただけだ。

思ってた以上にショックを受けている自分に驚いた。

俺、こんなにも相原が好きなのか？

好きなんだろうって自覚はあったが……一度食事を断られたくらいで、こんなにダメージを受けるほどだったとは。

告白して潔く振られようと覚悟したはずなのに迷いが出る。

デートって事は男が居るんだよな。

男がいたら、上司となんて考えない。

しかも、つい最近まで棘々した態度で、睨むかのような目つきだったしな。

社内の女で、自分の部下。

決して手を出していい相手じゃ……ない……よな。

しかも振られる確立が高いのに、その後一緒に仕事なんて気まず過ぎるだろ。

告白すること事体が迷惑なのかもしれない。

こんな弱気な自分は初めてだ。

なんとか自分を納得させようと試みたが、なかなかうまくいかなかった。

仕事ならなんでも思い通りになるのに、不甲斐ない。

気が付くと、定時をかなり過ぎていた。

仕事もせずに会社に二時間も居たなんて……俺らしくない。

とりあえず帰ろう。

明日は土曜だし、気分転換に一人で酒でも飲むか？

いや、止めておこう。ベロベロに酔ったとこで、この想いは消せそうにない。

会社の最寄駅から乗り換え駅までは二駅。

複数の路線が乗り入れているこの駅は、駅ビルの中だけでは乗り換えがでず、俺が使ってる路線へは五分ほど歩く。

その間は商店街になっていて、飲み屋やカラオケなどが立ち並び人通りが多いところだった。

なぜか人の流れに乗れず、いつものペースで歩けない。
おかしい……。人ってこんなに早く歩いてたっけ？

すれ違う人の肩がぶつかり一軒の居酒屋の前に押し出された。

その時、店から勢いよく何かが飛び出してきた。

何だ？ デジャヴウか？

先程と同じように人が飛び出してきたが、茫然と歩いていた俺は咄嗟には止まることが出来ず、ただ抱きとめることしか出来なかった。

「わっ！ ご、ごめ……。ん……。さ……。さ……」

そう言って顔を上げた女性は……。またもや相原だった。

なぜ、相原が目の前にいるのだろう。

こんな偶然ってあるのだろうか。

それとも、俺は夢を見てるのか？

しかも彼女は、かなり酒の臭いを漂わせている。

男とデートだと思っていたが違うのか？

酒なんて飲んだらこの間みたいにならないのか？

そんな疑問が一瞬で吹き飛んだ。

いきなり相原が抱きついたままキスをしてきたのだ。

そして思考が停止し、今日の出来事思い返したのだが、やっぱり訳が分からないままだった。

なんでいきなり？ 道端で会った相原にキスされてんだ？

チュッと音がするような軽いキスの後、もう一度唇が合わさった。
今度は唇を合わせるだけのキスではなく、唇でやさしく包み込むようなキスで、唇の感触を楽しんでいるようだ。このまま角度を変

え深くキスがしたくなるのをグツと堪えた。

まさか、彼氏と勘違いでもしたのだろうか？

今の俺にはキツイ冗談だった。

これで彼氏の名前でも呼ばれた日には立ち直れないな……。

キスをしてきたと言うことはキス魔になっているのだろうか？

男でキスできれば誰でもいいのか？

そんな疑問が浮かんでしまうほど心が荒んでいた。

唇を離した相原は「主任、なんでここにいるの？ 吃驚したよ」

！」なんて言つてくすくすと笑ってる。

そりゃ驚くだろ！ キスされたオレのほう吃驚だ！

それでも『主任』と呼ばれたことにより、ちゃんと自分だと認識してくれているのが嬉しいなどと思ってしまう。

こんなときですら唇の感触に酔いしれ、濡れた唇が『もっとと誘うようだ。』

酒の入った相原は、酔って目付きが色っぽく見える。

やっぱりスカート穿いてるなんて、いつもと違うな。

しかも、ちょっとスカート短くないか？

相原はそのまま腕を背中にし、顔を胸にぴったりとくっつけて目を閉じ「心臓の音が心地いい」と言っただけで動けなくなった。緊張して脈が早くなっているのがバレているのかも知れない。

相原は彼氏がいても、他の男とキスするような女なのか？
オレの心を弄んで、まるで小悪魔だな。

相原。頼むから幻滅させないでくれ……。

16・酒乱、再び 2 〱 慎一 side

「蕾！ 走っちゃダメでしょ？」

そう叫びながら相次いで店を出てきたのは、女性ばかり三人ほどだった。

彼女達は俺の顔と抱きついている相原を交互に見て、驚いた表情のままお互いの顔を見合う。

「えっと……相原の友達？」

俺が相原の名前を出したことで、三人は安堵した様子を見せた。きつと、相原の抱きついていてる相手が全くの他人だと思っていたのだろう。

相原の友達だと自己紹介してくれた三人を前に、自分も名乗ろうと思っところとで相原がよるめき肩を抱いて支えた。

「あの……ごめんなさい。もしかして蕾の上司の森崎さんですか？」
改めて自己紹介を、と思っところとで友人の一人から声を掛けられた。

名乗ってもいないのに、自分の名前を告げられ驚愕する。

「え！？ ……なんで名前を？」

「すみません。さつき蕾にカッコイイ主任が居るって聞かされたので、そうかな？」

「そうそう。珍しく真っ赤な顔して話してたよね」

相原は俺の話を友達にしてたのか？

しかも、俺のことをかっこいいだって？

信じられない相原の言動に戸惑いが隠せない。

ふと、相原に視線を落とすとなんだか様子がおかしい。不安定に頭が揺れている。

「おい……相原？」

呼びかけても返事が無く、友人の一人が顔を覗き込む。

「薔、大丈夫？ ……あれ？ ……うそ。 ……寝てる」

……ね、寝た？ この状況で？ マジで立ち寝かよ！？

俺に抱きついたまま眠るなんて、ずいぶんと器用なんだな。

「ちょっといいですか……」と話し始めたのは彼女の友人の一人だった。

立ち話も何なので、場所を飲み屋の真正面にあるオープンカフェに移すことにした。

丸いテーブルには椅子が四脚あり、そのひとつに腰かける。

抱き付いたまま眠っている相原の身体を横向きにし膝の上に座らせた。それでも彼女は起きることなく俺に腕を回し、胸にぴったりと顔をくっつけ眠り続ける。

友人達の話では、今日は女ばかり四人で飲んでいたらしい。

合コンなどではなく、女だけだと聞いて安心して自分のいる。しかも彼氏がいないという情報まで確認することが出来た。

なんでも『恋愛下手で彼氏は長い事いない』と言う。

その事実思わずポーカーフエイスが崩れて笑みを零してしまった。

それだけで、たぶんこの友人達は俺の気持ちに気が付いただろう。

三人は顔を見合わせ軽く頷き、安心したように笑顔を見せた。

相原について色々と話してくれてた三人だったが『酒』についてはあまり話してくれなかった。

「えっと、酒癖が……ちょっと……ね？」

「良くないって……言うか……ね？」

「飲めない……ってほどわけじゃないんだけど、ね？」

と言葉を濁し、また友人同士顔を見合わせる。

きつとキス魔のことだな。

上司である俺に言ってもいいか悩んでいるんだろう。

「相原は酒飲むと『キス魔』になる……だろう？」

俺が知っていることがよほど驚愕だったのか、三人とも「え……」
と言ったまま黙ってしまった。

「知ってるよ。実はこの間だったんだが、俺もこの目で見た……と
いうか体験した」

思わずそのときの事を思い出し笑いが零れる。

「結構遅くまで二人で残業してたんだ。残業自体はよくある事なん
だが、新入社員なのに真夜中まで付き合わせてしまった。だから、
お礼のつもりで食事に行ったんだ。俺が酒頼んだ横で『飲めない』
って通してたんだけど、暑くて喉渴いてたんだろうな『一杯だけ』
ってビール頼んで。そしたら一気飲みするし、その後二杯もおかわ
りして……」

「で。変身しちゃったんですか？」

「店内では見た目普通だったし、会話も成立してた。悪酔いするつ
て自分で言ってたけどそんな事なかったよ」

「というと、店出た後ですか？」

「そう。遅くて終電も出た後だったから、タクシー拾おうと思って
目を離してたんだ。そしたらタクシー待つ間に様子が変わってきて、
いきなり……」

「やっちゃったんですね」

はあー。っと三人揃ってため息を吐く。

同い年の親友だと言うが……完全に相原の保護者だな。

「その後送って行っただけど、次の日には全然覚えてないし……」
「すみません」

またしても三人揃って謝る。

「今まで……って言っても、一番最初に二十歳の頃かな？ みんなで飲んでキス魔になることに気が付いてからは外で飲ませないようにしてたんですが……」

「二十歳の頃から、こんななのか？」

「ええ。でも、本人はキス魔になる自覚無いかも……」

二十歳の頃は誰にキスしたのか？

つい先程自分の身にも降りかかったことなのに、他の誰かにキスしている相原を思い浮かべ無性に腹が立った。

顔色の変った俺を見て「されたのは私たち三人だけで、男の人には私達が阻止したので、今までは未遂ですよ！」と教えてくれた。なんでも制御できなかったのは、俺が初めてなんだそうだ。

……しまった。また、顔がゆるむ。

話も終わり、カフェを出てタクシーを拾うべく大通りへ向かう。

それでも眠ったままの相原。

必死にしがみ付いている姿まで愛おしく思える。

重症だな、俺。

「おい。相原！ 起きろ！」

眠りが深いのか少し揺すってみても反応はない。

「藹、一度寝ると朝まで起きませんよ」

「そうそう。前も救急車の中で寝ちゃって、治療が終わって帰れるのに起きないから一晩入院したんで……」

「しかも、二日酔いにはならないけど酔ってた時の記憶がないから、朝には一人スッキリした顔してるし……」

「ねー。合コンなんて連れてったら危険で連れていけないしね」と教えてくれた。

確かに酒飲んで合コンなんてオオカミの群れに自分から飛び込むぐらい危険だ。

自己防衛で『飲めません』が一番効果ありだな。

なんとかタクシーを止め、彼女の友人が『連れて帰ります』と言ったのに相原は俺から離れなかった。

「つーぼーみー！ 帰るよ！」

女二人掛かりで引き離そうとするが、ビクともしない。

俺に抱きついたまま、ジャケットを握りしめて離さない。離れるどころか余計に抱きつく力が強くなる。

「もう、力強すぎ！」

友人たちもお手上げ状態で、困り果てる。

そのうちタクシーの運転手に「乗らないんですか？」と急かされてしまった。

「悪いけど、俺が連れて帰るよ。このままタクシーいい？」

ため息と共にこんな言葉が零れてしまった。

彼女に気のある事がバレてる上で、お持ち帰りなんて友人は許さないだろうと思っただが……

「このまま結婚まで突っ走っちゃってもいいですよー！」

「薔が『キス魔』なのを知っているなら大丈夫かな？ 薔が迷惑かけますがよろしくお願いします」

相原の保護者代わりである友人に頭まで下げられてお願いされてしまった。

初めて会う俺がこんなに信用されている事に驚いた。だた、上司
ってだけでそこまで信用していいのか？

「蕾が森崎さんは厳しいけど、ちゃんとした人だって言ってたし。
最近では男性の名前なんて蕾の口から出なかったのに、今日は『森
崎さんが……』とか『主任が……』っていっぱい話をしてくれまし
た。それって本人が気が付いてなくても、気がある証拠だと思いま
す」

そう笑顔で話してくれた友人。

そしてその友人は最後に一拍、間を置いてから、刺すような視線
と凄みのある声で

「でも、もし傷つけたら……社会的地位を失うぐらいの覚悟をして
くださいね」

と、保護者らしい脅しも忘れなかった。

17・眠れない夜 1 〈慎一side〉

タクシーに乗り込んで「お客さん、どこまで？」という運転手に、自宅マンションの住所を告げる。

自分のマンションへ女を連れて行ったこと自体が初めてなのに、その女が寝ているなんてかなり後ろめたい気持ちにもなる。

タクシーの中は、相原の寝息と俺のため息、それと時々入るタクシー無線の音しかしなかった。

つい数時間前まで、醜い嫉妬と重苦しい恋心がかなりのストレスになっていた。それが今は、腕の中で眠っている相原を見つめるとスーッと心が晴れるようだ。

恋心を抱く相手を腕に抱いて幸せな時間であったが、幸せな時間はあつという間に過ぎてしまう。

こんな時に限って信号にも捕まらず、渋滞にも嵌らなかったのが恨めしい。

これから待ち受けるマンションでの時間が天国になるのか地獄になるのか想像もつかない。

音もなくマンションのエントランスに横付けするタクシー。

いつものようにカードで支払いを済ませ、相原を抱えて足早にエレベーターへ向かう。

マンション内に人気はないがたとえ面識がないとしても他の住人などにこんな姿を見られたくはない。誰にも会わないようお願いながら開いた扉に足を踏み入れる。

願いが通じたのか、誰にも接触しないで部屋へ帰って来れた。

玄関の鍵を閉めドアに寄りかかる。

すでに相原が寝入ってから一時間以上が経過しているが、相変わらずジャケットを必死で掴んでいる相原。

「おい！ 相原いい加減起きろ！」

「相原！ 聞こえるか？」

話しかけても肩をゆすつても返事はなく、スースーと寝息を立てている。

とりあえず部屋に運び、靴を脱がせるのを後回しにしようと思っていたのだが、俺が靴を脱ぐのに倣って相原も靴を脱ぐ。あんなに起こしても反応が無いのに、なんで靴を脱いだのが分かったのだろう。流石に寝たふりだろ？ と疑って再度揺すったが、無反応で起きなかった。

仕方なしに、リビングのソファへ下ろすが、未だジャケットの握り具合は弱くない。

このままじゃ離れられない。

マジマジと彼女の顔を見る。

こんな至近距離で見れるチャンスって中々ないよな！。

色白いな、まつげは長いし、酒のせいか頬はピンク色だ。

何度か重ねた唇は、誘っているかのようにぷっくりとしてつやつやだ。

寝顔……カワイイなあ。

相原って前からこの顔だよな。

俺、今まで相原のどこ見てたのかな……。

夢でも見ているのか時々まっげがピクピクと動く。

もし夢を見てたら、夢の中に俺は出てくるかな？

きつと嫌いな仕事人間の上司としてだろうな。

それでもいいから夢で……なんてバカか俺は。

そうだ。彼女は俺の部下なのだ。

酔っ払った部下を街で保護して連れて帰っただけだ。

必死に自分自身に言い聞かせてみる。

しかし、横になった彼女を押し倒すかのようになっている体勢が悪い、好きな女が目の前で寝てるのに見ているだけなんて拷問だった。

『こんな据え膳状態、男だったら……』とか『最初にキスしてきたのは彼女だ』とかいくら言い訳しても仕方ないけど、結果として俺は目の前の誘惑に勝てなかった。

つい出来ところで、柔らかな唇を味わいたくなってしまった。

ちよつとだけとチュつと軽く触れるだけのキスをして、ドキドキと顔を覗き込む。

……まだ、寝てる。

そうすると欲が出てくるのが人間で、起きないのをいいことに、唇を食った。

もつと、もつと。

これ舌絡めたら起きる……よな？ 頭では分かっているけど一度走り出した暴走列車は止まらない。

すると、突然相原が「うっ、うん」と悩ましい声を出して身を擦った。

ハッとして我に返るのと同時に相原のジャケットを握る力が弱くなり、腕がだらりとずり落ちる。その隙に後ろへ仰け反って彼女から離れた。

一瞬起きたのかと心拍数が一気に上がったが、動きを止め息を潜めて平静を取り戻している間にまた小さな寝息が耳に届く。

そろーっと相原の顔を覗き込み眠っていることを確認する。……よし、寝てるな。

はあー。あつぶねー。

離れたのは良かったが、自分の仕出かしたことに頭を抱えどつと疲れが出た。マジで襲うとは、俺は寝てる女に何やってんだ？

この場合は離れたほうが賢明と、急いで風呂場へ行き熱いシャワーで全てをリセットした。

最後には頭から滝修行のように水も浴び、邪念を洗い流しサッパリしてリビングへ戻った。

頭からタオルを被り、髪を拭きながらキッチンへ。視界を狭くして相原を直視しないよう注意して冷蔵庫から缶ビール一本とつまみ類を調達した。

いつもはテレビの正面の位置のソファに座るのだが、相原を寝かせてしまったので、今はその隣座りテレビを付け、缶ビールを開けた。

し字型のソファで横長の方に彼女を寝かせたのは失敗だったかも

しれない。向こうの肘掛を枕代わりにしているので、短いヒラヒラしたスカートから伸びる足が丸見えだった。いつもの地味なスーツ姿の彼女からは想像もつかないほど、すらりとした足から目が離せない。

これはヤバいと寢室に駆け込み、タオルケットを持ち出して彼女に掛け一息を吐いた。

『まだ、大丈夫だ。理性が勝ってる』と自分に言い聞かせる。

先程一度負けてるにもかかわらず、今度こそ大丈夫と心に誓う。

18・眠れない夜 2 〱 慎一 side

ビールを一口流し込んで、溜息を零す。

さつきからテレビに集中しようと画面を注視しているものの、相原が足を組み替えたり、寝返りを打つたびに意識が飛びそうになる。こんなに俺が理性と戦ってるのに、なんという穏やかな寝顔なんだよ！

起きたら、しっかり責任を取ってもらわないと……なんて無理か。

寝たら朝まで起きないと聞いていた相原は、静かに寝てるのかと思いきや、かなり頻繁に寝返りを繰り返していた。

ソファじゃ寝心地が悪かったんだな。悪いことしたな。やっぱり俺がソファで寝て相原をベッドに寝かせるべきだった。でも、ベッドに置いたら最後、そのまま襲う可能性が高かったのだから仕方ない。

何度目かの寝返りで、ソファからずり落ちそうになる相原に気が付き慌てて駆け寄り体を支える。なんとか落ちる寸でのところで受け止め、ソファへ押し戻すことが出来た。

ギュッ。

暖かく柔らかい手が俺の手を捉え、指を絡めた。

手が握られていることに気が付いたが、ジャケットを握ってた時同様で簡単には離してくれそうもない。

仕方なしに床に腰を下ろしソファに寄りかかる。そして背中相原が落ちないようにガードする。

右肩越しに二人の手が繋がっている。

背中や手に相原の体温を感じる。これだけのことで安心感が広が

る。

プルルルル♪ プルルルル♪ プルルルル♪ ……
静かな空間を切り裂く音が響く。

はっ！ 携帯！？

誰だよ！ こんな時に！ 相原が起きるだろー。

テレビのボリウムは絞ってあったが、着信音がこんなに大きいかつたとは……。

目の前のテーブルの端に携帯が見えた。……が、遠い！

相原が起きるといけないから、とテーブルの端に置いたのが裏目に出た。

テーブルに精一杯手を伸ばし、やっとの思いで手が届いた携帯を開くと『ひばいち檜葉英知』の文字。

こんな時に限って、コイツかー。

こいつはヒバコーポレーション社長の三男坊で、俺の大学の後輩だった。

勘のいいヤツだし、何か気付かれても面倒なので出たくない。…

…が、このまま相原が起きてても困る。
ため息を一つ吐いてから、仕方なしに通話ボタンを押す。

『シン先輩、こんばんは』

「おう。どーした英知？」

気持ち声を抑えて、後ろで寝ている相原の様子を伺う。

大丈夫だ。まだ寝てる。

『どうしたって、用もないのに電話しません。明日の確認ですよ』
「ん。明日って何だっけ？」

『忘れてますね。明日のOB会、汐風駅に七時です。用件はそれだけです。……おやすみなさい』

OB会。それは俺が入っていた大学のサークルOBで集まる飲み会のこと。

このサークルは運動を楽しむためのサークルで春はサッカー、夏はマリンスポーツ、秋はラグビー、冬はスノボと年中出掛けて行っ
てはスポーツを楽しんだ。

しかもこのサークル女人禁制という男くさいサークルで女とスポーツを楽しもうとかいうやつは一人もいなかった。たとえスノボなどで女が寄って来てもナンパNGだ。その分男同士で卑猥な話は多い、そんなサークルだった。

未だに飲み会で二十人も集まると暑苦しい感はある。女の話はしても、基本呼ぶことはない。いつからか結婚の報告の時だけ、婚約者を連れてきて顔見せするというルールが加わったのだが。

三ヶ月に一度の割合で定期的に行われており、昔の仲間が集まる意味合いよりも仕事を始めた奴らの横の繋がり強化のためと言ってもいいかもしれない。

「ちょっと待て。英知！……俺、明日パス……」

『ダメですよ。俺が幹事なのに、人数変更面倒じゃないですか。それに結婚報告するやつもいるので、代表経験者は強制出席です』

「うーん」

突然後ろから声が届き繋いでいた手が離れた。相原を起こしちゃったか？ と振り返ろうと思ったとき

「しゅ……ん……ダメ……」

相原の両手が首に巻きつき、肩の上に顔が乗って耳元で何かを宣った。

おいおい！ 俺の夢か？
しかも『ダメ』って何がだよ。

後ろから抱きつかれたようだが……相原！ 寝ぼけて何してる！
一気に茹蛸のように顔が赤くなってることだろう。
ヤバ！ 鼻血出そう。

電話中じゃなかったら襲うぞ！

……あ！ 電話中だった。

慌てて携帯の通話口を押さえてみるが聞こえているのは確かだ。

『……シン先輩？ こんな時間に女と一緒にですか？ しかも部下に
手を出すとは……』

「違っ！ 違っ！ んなことねーよ。部下とか馬鹿なこと言っなよ
！」

やっぱり電話に出るんじゃないかった。

俺に長いこと女がいないことも知ってるし、突っ込まれるよな……
…。

『先輩。相変わらずですね。……早口になってますよ』

うわ。棘のある言い方だな。お前には先輩を敬う気持ちはないの
か！

俺は嘘を吐くのが苦手で、嘘や誤魔化したい事があると早口にな
るらしい。

そう指摘したのもコイツだった。

「……英知。悪いけど今手放せねーから、明日掛け直す……」
ため息と共に紡ぎ出した言葉は肯定と捉えられるだろう。

いまさらコイツに隠してもしょうがない。

『クッククツ……いいですよ。明日は欠席って事で。その代わりに詳しい話は後日聞かせてもらいます。それでは良い夜を』

電話を切るのと同時に、相原の腕が弱まり、ソファにコテツと転がる。

コイツ……状況判ってて、俺を弄んでるのか？

「……す……き……」

???

今『好き』って言ったか？

幻聴か？

俺の耳が自分に都合のいいように変換したか？

寝言では聞いてはいけない言葉を聞いてしまった。

これは起きてる相原から聞きたい言葉だ。

……でも、コレが本当に『好き』だったとしても、『俺』とは限らねーよな。

まあさつき、『主任』ってはっきり聞いたけど……。

なんか余計に自分を追い込んでしまった気がする。

ふと、グラスに映る自分の顔が目に入った。

俺って元からこんな顔だったか？　と思うほどだらしく緩んでいた。

はあー。俺も相原の言葉や行動に一喜一憂すんなよ。思春期じゃあるまいし。

このままここに居たら、朝まで一睡もできないな。
とりあえず寝室に避難して、横になって休むか……。

帰宅からの一時間半経っているが、一ヶ月不眠不休で働いたぐらの疲労感が漂う。

ぜってー寝れねーって思ってたけど、こんだけ疲れてりゃ眠れるかな。

リビングの照明を消し、念のため間接照明の光を絞って点けておいた。

疲れた体を引きずるように寝室へ引き上げ、力なくベッドへダイブする。

はぁー。唯一ここが俺の安息の地だ。

目を閉じ、これで視界にも入らず、一安心……のはずだった。

まさか、夜中に目を覚ました彼女があんな行動に出るとは……。

19・私は露出狂？　　～side～

目を閉じていても明るさを感じ、朝が来たことを教えてくれる。
でも、眠い。まだ目が開かない。

寝返りを打とうとして、ふと体の違和感を覚える。

ん？　体中が痛い。筋肉痛？

そして少し寒さを感じ、両腕で自分の体を抱きしめようとして、
はたと気付く。

あれ？　パジャマは？　は、はだか……？

一気に目が覚めた。

布団の中で恐る恐る自分の体に触れると、下着まで付けていない
ようだった。

裸ってことは、脱いだんだよね？　暑くなって脱いだにしては下
着まで付けてないっておかしい。

「あー！！！！　遂に、やっちゃった！？」

そうだ、昨日って……。

シヨックを受けて働いてくれない頭を抱えて、昨日の出来事を整
理しようと思い返す。

確か、煌李・くるみ・美羽の友達四人で久しぶりに集まって……
お酒を飲んだ。

飲んで……主任のことが好きなんだって自覚したんだよね。

その後……どうしたわけ？　考え込むが……駄目だ、まったく思
いだせない！

だいたいどこで脱いだのかな？　家の中ならまだしも、外だった

らどうしよう。公然わいせつ罪とかだよな？ それって私は犯罪者
ってこと？

うわぁ。親になんて説明しよう。もうヤダ、泣きそう。……じゃ
なくてホントに涙出てる！

今までの幸せな人生が走馬灯のように脳裏をよぎる。

酔って記憶を無くすどころの騒ぎじゃない！ まさか『露出狂』
にまでなるなんて！！

「もう、お嫁に行けない！！！」

「おい！ いつまで一人芝居やってんだ」

恥ずかしさで赤くなったり、自分の失態に青くなったりしている
ところへ声が聞こえ、はじめて一人じゃない事に気が付いた。

振り向くとそこにはドアのフレームに寄りかかる森崎主任の姿が
あった。

慌てて布団を体に巻きつけ、あたりを見渡す。

白い壁、ダークトーンで纏められた家具、悠々と二人は寝れそう
な大きなベッド、そしてそのベッドを置いても余りのある広い部屋。
さらに明かりの差し込む大きな窓。

明らかにそこは自室ではない、見ず知らずの部屋だった。

起きてすぐに自分の部屋じゃないことにも気が付かないのか……
私って。

「主任？！ 何でここに？」

「ここは俺の家。しかも、呼び方が戻ってるし。……やっぱり昨日
の事は覚えてないのか？」

「昨日の事……？ 呼び方……？」

「そう。昨日は名前で呼んでくれた」

微笑んだ主任の顔に別の主任の顔が重なる。
それは……いつの顔？

『……蕾』

あれ？ 名前で呼ばれた？

記憶の断片がチラつくが、夢なのか、現実なのかもあやふやでわからない。

目を瞑り、必死で記憶を辿る。

『主任。あの、待って……』

『こんな時に主任は無いだろ。名前で呼べよ』

『名前？ えーっと』

『まさか、名前覚えてないとか言うなよ！』

『覚えてますよ！ えーっと……あの、慎一……さん？』

うわ！ 思い出した。

名前を訊かれて、一瞬で脳内の名刺帳から名前を検索し答えたんだ。

酔っ払っても、頭は働くのね。私の頭ってスバラシイ！

「確かに……慎一さんって呼んでましたね……」

「ああ。思い出してくれてうれしいよ」

につこりと微笑む主任。仕事中の『鬼』からは想像つかないほど穏やかな笑顔。

噂では主任の笑顔見れば幸せって言ってたよね？ 確かにこの屈託のない笑顔見ると幸せになる気がする。

「主任……」

呼び方が気に入らなかったのか、ちょっと眉間に皺が寄った。

「……じゃなくって、慎一さん？ あ。昨日何があったんですか？」

慌てて名前を訂正した上で、記憶の無い昨晚について聞いてみた。

「他は思い出さないのか？」

笑顔が一転、急に捨てられた子犬のようにシユンとしてしまった。やだ、そんな淋しそうな顔しないで。自分が悪いことをした気になるよ。

他……他は……？

なんだろう。全然思い出せない。

でも、主任の部屋・ベッドの上・全裸……この事から導かれる事は一つだけ。

「すみません。覚えてないですが……もしかして主任と……」

段々小さくなる私の声を掻き消すかのように、盛大なため息が聞こえた。

「取り合えず、シャワー行つて来い！」

飛んできたバスタオルが顔を捉え真つ白な世界に包まれる。

バスタオルを引き剥がすと主任の姿はなく「風呂場は玄関の横だぞー！」と声だけが聞こえる。

あれ？ 何か怒らせちゃった？

布団を頭から被り、バスタオル一枚を体に巻き付け、意を決して布団から出る。

気持ち的につま先立ちで歩き、首だけ廊下へ出して辺りを窺う。

なんでつま先歩きかって？ なにも主任の部屋が汚いんじゃないよ。

綺麗な部屋を私が歩いて汚しそうっていうのもあるけど、自分の知らない場所……つまり自分のテリトリー外で、少々不安があるのよ。意外と小心者だから。

廊下は左がりビングらしく磨りガラスのドアで、そして右の突き当たりに玄関が見えシューズボックスの上に花が生けてあった。

玄関の隣だからあのドアね。

一つのドアに目星を付け素早くそのドアへ向かって小走りに進む。

はぁー。なんで、裸で他人の家の廊下をキョロキョロしてるんだろっ。

いい年した大人の行動ではないよね。

うっう。酒って怖い。

脱衣所でバスタオルをはずすのに抵抗があったため、そのままバスルームへ。

バスタオルをたたんで、浴槽の蓋の上に置いた。

とりあえずシャワーのコックを捻り、頭から被って考え込む。

ザーツと音を立てて、シャワーを浴び、その音で現実と妄想の壁を作る。

——しちゃったよね。

彼の部屋で迎える朝。

全裸で寝ていたベッド。

何とも言えない、体の気だるさ。……特に下半身。

もっと言えば体の中心に感じてる、何とも言えない違和感。

酔って記憶がないとはいえ状況証拠だけで、犯行を断定出来る事態だよ。

恋心を自覚したのが昨日だったよね？ それからステップアップが早すぎて付いて行けてない。

はっ！ 占いに載ってたジェットコースターみたいな恋ってコレ！？

……やっぱりそうだね？ やっちゃったんだろうなあ。

恋愛下手な私が、全裸で他人の家に居るなんて他の理由が見つからない。

でも、こうゆうのって『好き』になって『告白』して、相手がOKだった場合に『付き合って』二人の気持ちが一つになってから……じゃないの？

暫らく立ったままシャワーを浴びていたが、正面にある鏡が気になっていた。

たぶん座ったときに顔が映るもので、立っていると足元しか見えない。

というか、意識して見ない様にしてた。だって、改めてこんな場面で自分の裸が映るのが恥ずかしかったから。

少し屈んでそーと鏡を覗き込む。

途端に真っ赤な顔の自分が映る。

しかし、真っ赤なのは顔だけではなかった。

なに……？ これ？

ま・ま・まさか……！！

コレが、あの有名なキスマーク！？

しかも、これ幾つ付いてるの!?

鎖骨の辺りから、胸、お腹や二の腕にまで、湿疹かと疑うほど、小さな赤い痕が無数に付いていた。

思わず、口がパクパクと鯉のように動く。

こ・こ・声が出ない。

これは決定的な証拠だ。

軽い眩暈が襲ってきて、壁に手を付いた。

数回深呼吸を繰り返し、落ち着きを取り戻そうと努力する。……でも全然落ち着かない。

あー、もう！ 主任！ 酔っぱらいに手を出すような人に見えないのに。

なぜ、手を出すかな？

人のせいにするわけじゃないけど……って、してるか！

一番悪いのは……はい、酔っぱらいの私です。

『じこせきにん』だよ。

自己責任。事故責任じゃないよ。

……起こったことは事故でも。

はあ。もうため息しか出てこない。

いや、反省してるよ。ホント。

あー。もうやだ！ ホント、外で酒飲むのやめよう！

禁酒だ！ 禁酒……外ではね。

ここで『完全な禁酒』とは言えず、『外で』って付けちゃうところに自分の意思の弱さを感じる。

でも、無理な目標を掲げるのも現実離れしてるよね。

……家に帰って、自棄酒しないようにしないと……。

20・二人で朝食　く　薔　s i d e　く

あれ？　主任って……彼女いないのかな？

でも、先日の首元に赤い痕が付いていた。あのキスマークを付けた相手がいるはず……だよな。

玄関に花があったって事は、その彼女が生けてるのかもしれない。まさか、主任が生けたなんて事はなさそうだし。

やだ。すっごい罪悪感。……彼女さんゴメンナサイ。

片思いならいいと思ってたけど、関係を持ってしまうなんてダメじゃん。なんか涙が出てきた。

彼女がいるのに部下と関係もつなんてダメですよ。主任。

暗い気持ち洗い流すように熱めのシャワーを浴び、幾分サッパリして脱衣所へ出ると新しいバスタオルの上に、濃いグレーのＴシャツと黒いスウェット地のハーフパンツ、メンズ物の封を切ったない黒いボクサーパンツの新品が乗せてあった。

もしかして、コレ着ろって事？

男物のパンツでしょ？　いくら新品でも、無いでしょ？

主任なりの優しさなのかな？

でも、何も履かないなんて、もっと無理。

ボクサーパンツを手に取り、履いてみる。

サイズがＳとなっていて、意外と履けない事もない。

服だって、明らかに女物の彼女の服とか出されるよりよっぽどマシ。

決して、色気はないけどね……まあ、誰も色気なんて求めちゃいないって？

ブラなしてＴシャツを着ることもないので、スースーして気持ち悪いがしかたない。

洗面所でドライヤーを借りて、髪を乾かす。

暖かな風を浴びながら周辺を伺う。鏡の周辺も綺麗に片付いている。こんな時に女物の歯ブラシが無いか……とか、無意識に彼女の形跡を探してしまう自分がイヤだ。

そして、ふと思い出す。

あれ？ 昨日着けてた下着は？ どこかにあるはずだよね。

脱衣所を出て、さっきまでいた寝室へ向かう。

ベッドの周りを見渡すと、壁との隙間で小さくまとまっている下着を発見した。

とりあえずブラだけでもと思い、身につけた。一応そわそわしていた気持ちも落ち着く。

そこで、もう一つの疑問が浮かぶ。下着はあるが、服が……ない？ 昨日はほら、ピンクのスカートかと着てたよね？ どこだ？

廊下から、リビングのドアをノックして、少し開ける。

そろーっと開けて、中を覗くと、主任がキッチンで何かを作っている。

余計なものが出ていないスッキリと片付いたキッチン。

もしかして、このキッチンで彼女が食事の用意をしたりするのか

な？

主任の立つ後ろにある食器棚でもちゃっかりとお揃いの食器が無いかとチェックしてしまう。

……ダメだ。どんどん自分が嫌な女になる。

「あの〜。シャワーありがとうございました」

「ああ。メシ食うだろ？」

ダイニングにはサラダと目玉焼き、トーストが並び、コーヒーを両手に主任が腰を下ろす。

『いいえ』と答えるよりも早く、グウ〜。とお腹が返事をした。クツクツクと笑いながら「食うね」と返される。

うわー。なんて言う恥ずかしさ。きつと今、真っ赤だよね。

こんな状況でもお腹は空くのね。体は正直だ。

「砂糖とミルクはコレね」とテーブル中央にスティックシュガーとポーシオンタイプのミルクが小さなグラスに入って出てくる。

「……で。あの、昨日は……すみません、でした。」

「何？ 思い出した？」

「いえ、あの。……まだです」

「じゃ、話は後。メシが先」

サラダのドレッシングはこれしかないから、和風と書かれた瓶を指さし食べ始める。

「はい」

ダイニングの椅子に腰を下ろし、入れてくれたコーヒーに砂糖とミルクを足し、口を付ける。

悪い事をして母親に怒られるのが確定してるのに、にこにこして母親を目の前にいつ怒られるのかとドキドキしてる気分。

悪い事……したんだよね？ ……きつと。

そうだよ。彼女さんに申し訳ないぐらい悪い事をした。

先の見えない不安が押し寄せ、喉が詰まり正直食事どころじゃない。

すると、食事の手が止まっていることに気が付いた主任が「どうした？ 気分悪い？」と優しく声を掛けてくれる。

そして声以上に、目が優しいの。

なんでこんなに優しいの？ もっともっと好きになっちゃうじゃない。

「大丈夫です」と元氣に見えるように笑って見せる。

そうだ。まだ判決が出てないのに今から敗訴確定で泣くことない。今だけでも、主任の彼女気分で作ってくれた朝食を堪能しよう。

休日の朝、一緒に夜明けを迎えた二人が、彼の作った朝食を食べる。

うんうん。いいシチュエーションだよ。

恋愛上級者向けかな？ 中々体験できないかも。

よし。心してこの状況を味わおう。

トーストをかじり、主任を見つめる。

朝日を浴びて、コーヒ一片手にさわやかに微笑む主任。ステキだ。こんなの誰だって惚れるわ。

主任は今、目玉焼きに醤油を掛けている。それすらカッコいいことみたい。

「あの、おソースもらってもいいですか？」

「ソース？ 何に使う？」

と少々主任の片眉が上がったが冷蔵庫から出してくれた。

目玉焼きにソースを掛けると「うわぁー」と声が聞こえた。

「ダメですか？」

「目玉焼きには醤油だろ？」

「ご飯の時はそうしますけど、パンの時はソースなんです。美味しいですよ！」

「へー」

気のない返事は、試してみようとは絶対に思っていないだろう。

用意してくれた朝食を全部平らげ、頂いたお礼にと、食器を洗わせてもらった。

そろそろ、お説教の時間かしら……。

新たに入れたコーヒーを持って、リビングのソファへ移動する。

「相原。ハウレンソウって言えば社会人の基本だから分かるよな？」

「え？ はい。報告・連絡・相談の事ですよね？」

「そう。じゃあ、まずは報告から……」

主任の話し始めた事は、私の想像を超えていた。

21・昨晚の真実　　〽️慎一side〽️　　(R15) (前書き)

R15となります。ご注意ください

21・昨晚の真実 〈慎一side〉 (R15)

「昨晚の事だけど……」

話し始めた俺の顔をじつと見つめ、口をポカーンと開けたまま動けなくなった蕾。

まあ、普通そうだよな。

いきなり上司に「俺が襲ったんじゃないで、俺が襲われたんだぞ！」なんて言われりゃーな。

そう。無理やり俺が襲った訳じゃない。

昨晚は……。

リビングに蕾を残したまま、寝室へ引き上げた。

俺は、好きな女が無防備に眠っているのを襲うまいと必死に理性を総動員しての踏ん張った。しかし、それがこんなに疲れることだとは知らなかった。

くたくたに疲れた身体は休息を求め、ベッドへ潜り込むと同時に眠りに落ちてしまった。

“カタン”

眠りに落ちてからどのくらい経ったのかわからないが、物音に気が付き意識が浮上する。寝ぼけ眼でドアの方向に顔を向けるも特に変わった様子は無い。耳を澄ましても何の音も聞こえなかった。

きっと相原がトイレにでも行ってるんだなと思い、再び布団に潜り込む。

“ドサッ”

今度はいきなり上から重量感を感じ驚愕して目が覚めた。時計な

ど見てないが、先程から数分しか経ってないように思う。真っ暗な部屋の中、目を凝らすと布団の上に誰かがいる。

誰かって……この家には俺以外では相原しか居ないのだが。

「まったく相原の奴トイレから帰るのに、間違って部屋に入ってきたのか？」

そう思い、手を伸ばしサイドボードにある照明を付けた。

オレンジ色の弱い光の中に浮かび上がったのは、自分の上に跨り覆いかぶさっている相原だった。

それだけで飛び上がるほど驚いたのだが、それ以上に度肝を抜かれたのは相原の姿だった。

「あ、あい、相原！？ な、な、なんで下着姿なんだ？」

「服はどうした！ 服は！！」

しかも真黒な総レースの下着って、どんだけ大胆なんだ！

『おい。どうした？』と問いかけたいが、驚き過ぎて声が出なかった。そして、相原は「みーつけた」と言いながら顔を近づけて、チュツと音がするキスをしてきた。

何が起こったのか理解できず、目を見開いたまま固まってしまった。昨日から何度同じ体験をしているのだろう。

好きな女が目の前に居る。それも、俺の寝てるベッドの上……じやなく、俺の上。

下から見上げる相原は、顔よりも胸の谷間のほうが近い……といつか目の前だ。この体勢はかなりヤバイ。

肌の白さと下着の黒とのコントラストに目がチカチカする。

そんな状況でキスされニコつと笑って見せられても、誘っているようにしか見えなかった。都合のいい男の解釈なのかもしれないが、コレで我慢できる男はいないだろう。

昨晚、散々我慢したツケが回ってきたのかもしれない。ブチツと頭の何かが切れたのが判った。

そのまま、体位を入れ替え覆いかぶさった。俺からキスをするのもっと！」とせがんできた。

おいおい……煽るな！……たく、この状況わかってっって言うてんのか？

あんなにも必死で自分を押さえつけてきた俺の努力を無駄にしやがって。酔っ払いめ。覚悟は出来てるんだろっうな……。

薄暗い室内。ベッドサイドの明かりがより強い陰影を作り、蕾の体のラインを強調する。

「蕾、いいのか？」

「蕾だつて。えへへ、もっと呼んで〜！」

完全に俺のリミッターは、ぶっ壊れた。壊したのは蕾なんだから、責任はとってもらわないとな。

もう理性など、どこにも残っていなかった。

最初は唇の柔らかさを確かめるような、キスが続いた。

軽く押し当て、蕾の反応をみる。嫌がってるそぶりが見えないのを確認してからもっと進める。

昔、テレビで誰かが言ってた。

『ディープキスすると、男性ホルモンが唾液と一緒に移って、女がその気になる』って。

こうなったら、その気にさせてやる！

「ん。キス上手だね」

目がトロンとしてうつとりした顔の蕾が欲情的だった。

「蕾からしてきたのに、慣れてないのか？」

言葉の合間にキスを繰り返し、どんどん深くなり角度を変えて繰り返す。

「主任は？ 慣れてる？」

慣れてるかって？ なにがだよ。

キスカ？ それとも……？

片手が蕾の体を彷徨い、下着の上から柔らかな膨らみを捉える。そのまま背中に手を回し、鍵を開けるようにホックを外す。そしてセクシーな下着を口で咥えずらし、胸の膨らみに顔を埋める。

「待つて……。やあ、主任」

「こんな時に主任は無いだろ。名前で呼べよ」

「なま…え…？ ……えーっと」

なんだ、この間は。

顔を上げて蕾の顔をじっと見つめる。

「まさか、名前覚えてないとか言うなよ！」

「覚えてるよ！ えーっと……あの、慎……さん？」

自分で名前を呼んで欲しいとせがんだくせに、実際に名前で呼ばれると身体が熱くなる。

体中を流れる血液が沸騰したかのように熱く、ドクンドクンと激しく流れる。

渴いた体が水を求めるように、彼女を求めている。

露になった胸の膨らみを手で包み込む。吸い付くように手に馴染む。

自分の手と同じサイズかのようにピッタリと合う。それだけで彼女が『特別』に感じられる。そして、まるで世界で一つしかないパズルがピッタリと合うかのような喜びが沸く。

もう片方の胸の先端にキスをして、口に含む。

「ん。あっ……」

蕾の反応を見ながら、舌を転がす。

「あ！ ん……あ、ああ〜！」

蕾の声が喜んでるように感じて、余計に自分を煽る。もう、止まらない。手が体のラインを伝い下へ伸びていく。それと同時にもう片方の膨らみも、俺の口の中に隠した。

透き通るように真っ白い身体が、だんだんとピンク色に変わってゆく。滑らかな触り心地の素肌にも酔いしれる。

ゆっくりと進めて行き、下半身を覆う下着に手を掛けたとき、蕾がぎこちなく動いた。嫌がつている感じはしないが、慣れてないような反応に疑問が浮かぶ。確か友達の話では長いこと恋人がいないと言っていたが……まさか？

「もしかして、初めて……か……？」

訊きながらも手は止めることが出来ない。

「…ううん。…違う……でも、あっ……高校の頃に……一度しか……なくて……」

荒い呼吸の中、息も絶え絶えの蕾が答える。

一度だけ？ マジか？

経験の少なさに喜びを覚えるも、同時にはじめての男に嫉妬してる自分がいる。

「だから……キスの仕方……とかも……わかんなくって」

残業した日といい今日といい、キスをしてきたのは蕾だ。今だっ

て大人のキスにすんなりと応えてた。それなのに、キスの仕方がわからないという蕾が可愛く見えて、笑みが零れる。

「そうか、わかった。じゃあ、俺が教えてやるよ」

「キス……を？」

「キスから全部。……まずはこれから」

そう言って、ゆっくりと唇を合わせた。くっつけては離し、また合わせる。その繰り返しの中でだんだんと深い口付けに変わってゆく。

「ん。上手だよ、蕾」

唇を舐め舌を絡めれば、ちゃんと蕾も絡めてくれる。

キスは唇だけでなく、全身に及んだ。

閉じた瞼にもキスしてから、耳たぶを甘噛みし、中へ舌を捻じ込む。

「ああ！そこ……は、ダ……メエ……」

弱いポイントらしい耳から唇を離すと、今度は真っ白な首筋から甘い香りがしてくる。まるで自分が吸血鬼にでもなったかのように魅力的な首筋から目が離せなくなり、唇を寄せ思いつきり吸い付く。白い素肌にキスマークが鮮やかに浮かび上がる。真っ赤なその痕が言葉に出来ない『愛してる』を身体に刻み付けたような気がしてしまう。そのまま夢中で全身に唇を寄せてゆく。

丁寧じっくりと蕾の身体の全てを味わってゆくと、段々と蕾の力が抜けてくつたりとしてくる。

「あーん。離れちゃ……や……」

少し体を離すと、寂しそうな声を出し、両手を伸ばして俺を引き寄せようとする。

「ああ、分かってるよ。今度は蕾の全てを俺にちょうだい」

「ん」という声と共に、少し頷いたように見えた。

そしてそのまま、数時間と焦らされておかしくなりそうだった自分を解放した。

22・想いを告げて　く　慎一 side

あったことを話し終わる頃には全てを思い出したのか、蕾は頭を抱えて頂垂れていた。

なんだよ。そんなに嫌だったのかよ。

昨晩は嫌がってなかったし、自分なりに了承を得たつもりでいたから、こんなに落ち込む蕾を見て少なからずショックを受ける。

「う……そ……。私から？」

ああー。思い出した訳じゃないのかあ。そういえば、残業した翌朝だつてまったく記憶に残っていなかったよな。やっぱり、酒飲むと前日の記憶は残ってないんだな。わかっていても、昨晩の熱い夜を特別に感じていたのが自分だけなんだと思うと……何とも言えず寂しさもある。

蕾はまだ状況が飲み込めていないのか、目が虚ろだ。

俺の話を信じてないというよりも、自分の行動が信じられないよ
うだ。

そりゃそうだ。俺だつて普段真面目で優等生な彼女がキス魔になるだけでも俄かに信じ難いのに、下着姿でベッドに潜り込んでくるなんて……自分の身に起きなきゃ信じないだろう。

その上彼女は、酒の力で記憶を無くしているし、わかっているのは起きた時の状況と俺の話だけなものな。混乱すると言うほうが無理な話か。

「悪かったよ」

彼女が誘ってきたかどうかは別としても、酔っていた蕾に手を出したのは事実だから素直に謝る。

「何で？　なんで、止めてくれなかったんですか？　私から襲つていて、こんなこと言えませんか……」

蕾は少し青ざめた顔をして、両手を膝の上でギュっときつく握り、震えた声で懸命に話す。

「俺だつてかなり我慢はしたさ。酔ってるのに手を出すなんてフェアじゃないと思つたし」

「じゃあ、なぜ？」

「仕方ねーだろ。何時間もお預け食らってるのに、下着姿でキスされて我慢なんて出来るか！」

「お預けつて……勝手に連れてきたのは、慎一さんじゃないですか！」

「ああ。勝手に連れて来たさ……。だからこそ好きな女を目の前にしても、こんなに必死に自分を抑えてきたんだろ！」

「……えー？」

蕾が驚きの声を上げ、そのまま時が止まったように目を見開いて動かなくなつた。

……ん？　俺、今なにを口走つた？　……まさか好きな女って、言つた……よな。

はあー。ちゃんと告るつもりだったのに。勢いに任せて言つてしまった。

隣に座る蕾は動きの止まったまま、呼吸すら忘れているんじゃないかと思うほど微動だにせず、瞬きすらしていない。

「お、おい！　……大丈夫か？」

心配になり目の前で手をかざし振ってみるが……反応が無い。意識がどうか遠くに飛んでいったままだ。

だいたい『好き』と告げてからの反応がコレってどうなんだ？

喜んでるんじゃないくて、驚いてるんだよな。ってことは俺が好きだとは思わなかったってことか？

……まさか、そんなことも考えられないほど蕾にとって俺って上司でしかないのか？

「す、す、好きな……女って？」

「蕾以外にいなーだろ！俺だって、ちゃんと蕾が素面の時に想いを告げてからって抱きたいって思ってたさ」

「わ、わたし？だって主任って彼女いるんじゃないんですか？」

「はあ？彼女って？俺いるなんて言ったか？」

彼女だって？なんだ？予想もしなかった蕾の言葉に驚きが隠せない。俺のどこを見たら女がいるように見えるんだ！？

「でも、玄関にお花生けてある……し。男の人の部屋にしては綺麗だし……。それに、この前だって首元にキスマーク付けてたじゃないですか。だから、女の人が……いるのかな……って？だから彼女さんに悪いことしたって……思って……」

さっきまでの切羽詰った声から、気の抜けた声に変わる。

目に見えて体の力が抜け、ソファに沈み込みそうになる体を支える。

涙を目にいっぱい溜めた蕾の声が震えてる。

こらえきれずに、頬を伝う涙。

いつも気丈な彼女の涙を見たのは初めてだった。

女の泣って『泣けば何でも許される』ような卑怯なものだと思っていたけど、蕾の涙がとても綺麗で、抱きしめたくて仕方がなかった。

女の人がいるかつて？

居もしない女に嫉妬したってことは、俺の事を気にかけてくれるのか？

キスマークで悩んだ？

自分で付けたのに、それに嫉妬するって。

どこまでカワイイことすんだよ。

体を蕾の方へ向き直し、手を取り重ねて、真剣な目を向ける。

蕾が息を呑むのが分かる。

「蕾。俺は蕾が好きだ。会社は仕事するところだし、社内で恋人作るつもりもなかったけど惚れたんだ。蕾にとったら嫌な上司ではないだろうけど、付き合って欲しい。……ダメならダメで言ってくれ。言ったからって仕事に影響はでない……から……」

想いを込めた言葉は、最後まで声にならなかった。

抱きついてきた蕾を受け止めるので精いっぱいだったから。

「ずっと嫌な上司だったのに、この間食事した時の笑顔見てから、何かが違ってたの。こんな気持ちになったことなかったから自分の気持ちかわからなかった。でも、キスマーク見て主任に女の人がいるんじゃないかって思ったら、モヤモヤと嫌な気持ちばかり溢れてきて……。嫉妬してたんだよね。嫉妬して初めて『好きなんだ』って気が付いたの。嫉妬するって好きって事だよな？」

「俺が……好き？」

「仕事でもいつか見返したい。認められたいって思ってた。でも、仕事だけじゃなく私、個人を見て欲しかったんだ……私よね、慎一さんが好き」

どちらからとも無く顔が近づき、目を閉じて唇を合わせる。

既に数え切れないほど何度もキスをしてるけど、これが恋人にな
って初めてのキス。

唇は閉じたままだが、離れるのがもったいない気がして長い間、
唇を合わせていた。

ニコッと微笑んだかと思うと、また「好き」って言葉に出した。

「ああ。俺も……好きだよ」

ヤバイな。自分から好きとか言ったことないのに……。

『好き』って言葉を聞くと、もっと好きになる。

そして、『好き』って言うと、もっともっと好きになる。

体が満たされるんじゃないかって、心が満たされるとこんなにも、
幸せって感じるんだな。

「なあ、蕾。本当に昨晚の記憶無いのか？」

抱き締めたまま、耳元で囁く。

二人の初めての時間を意識してるのが自分だけだと思うと寂しい
ような気持ちが広がってくる。自分のエゴだったとしても出来るこ
となら少しでも思い出して欲しい。

「ごめんなさい。夢を見てた気はするんだけど……」

「へえ。どんな夢？」

顔を覗き込むと、頬を染め照れた顔。

「えっ？ あ……慎一さんがいて、キスしてくれたり……あの……
…幸せな夢でした」

俺とのキスが幸せだなんて、そんなの何時だって幸せにしてやる。

照れた顔の蕾が可愛くって、またキスしたくなる。

でも、今したら、さっきよりずっと濃厚なキスになる。

そして、そのまま押し倒す可能性が高い。

高校以来人生で二度目って言うてたから、もう一回は可哀想だな？

いくら想いが通じたからって昨日の今日じゃ……そこまですごく歳でもないしな。

俺は心の中で『自制心、自制心』と唱えていた……。

それなのに蕾は、ポトンと俺の胸に顔を埋めて、潤んだ瞳で上目づかいに見上げてくる。

この行動が男にどんな影響があるかなんてわかってないよな？
此处でまた襲われたい……んな訳ないよな。

そして蕾は、また引き金を引いた。

「もったいないことしたな。酔って記憶がおぼろげなんて……残念」

「じゃ、今から教えてやるよ」

そう言うが早いか、蕾を抱き上げ寝室へ急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3139y/>

kiss manual

2012年1月13日16時56分発行